
魔法少女リリカルなのは―異世界に行ったエクソシスト―

シーザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは―異世界に行ったエクソシスト―

【Nコード】

N9477U

【作者名】

シーザス

【あらすじ】

ある日、少年は見知らぬ場所に居た。

主人公D・Gray-manのアレン・ウォーカーです。

主人公、オリジナルイノセンス持ってます。

色々オリジナル要素入ってます。

主人公稀少技能？創造する力？を持っています。
レアスキル

オリジナルキャラ出ます。

AKUMA、オリジナルAKUMA、イノセンス、オリジナルイ

ノセンス、技、オリジナル技出ます。

この小説では、アリシアとプレシアとリニスの三人が生きています。

原作から多少、もしくは少々ズレています。

プロローグ

プロローグ

此処が何処かはわからない。

二つだけわかつているのは、此処は僕が今まで居た場所じゃないと
いうことだ。

そして、僕はすでに死んでいる。と、いうことだけだ。

此処は何処なのだろう。

辺り一面真っ白で、一つの『扉』が在る。

ただ、それだけだ。

そして、部屋に翼を持った女性が入ってきた。

「あれ…？ 貴方は？」

「僕…ですか？ アレン・ウォーカーと言います。『エクソシスト悪魔払師』です。『神の結晶イノセンス』は、『クラウン・クラウン左手』の？神ノ道化？です。でも、何故か『コレ左手』のイノセンスが無くなって、今は『右手首』の？腕輪？がイノセンスです。」

「えっと…アレン・ウォーカーさん…」

「はい。そうですが…」

僕が返事をする、女性は、土下座をしながら僕に謝ってきた。

「すみませんでした！！アレン・ウォーカーさん！！」

「わわっ！？一体どうしたんですか！？話がわかりません！！」

「はい。そうでしたよね… 実は…」

そして数十分後――

「…じゃあ、僕が死んでしまったのは、貴方の部下の手違いによるもの…と、いう事ですか？」

「はい… 本当にすみませんでした…」

「謝らなくても良いですよ。？女神？」

「ありがとうございます… アレン君で良いですか？」

「あ、別に何でも良いですよ。僕も？女神？と呼びますから。」

「はい。わかりました。アレン君。貴方のその？腕輪？は、貴方の創造で、他の『イノセンス』を扱う事が出来ます。ただし、その？腕輪？で創造出来るのは『イノセンス』だけです。それから、全^{クラウン・クラウン}て『イノセンス』で全ての技が使えます。（例えば、？神ノ道化^{レアスキル}？で？六幻？の技が使える感じ。）後、希少技能と呼ばれている力があるのですが、貴方には、？創造の力？を授けます。最後に、貴方は全ての？ノアズメモリー？を使える様にしておきます。それと、貴方には？方舟？をいつでも使える様にしておきます。ちなみに…貴方がこれから行く世界にも、AKUMAが出てきます。ですから、十分に注意してください。それから、貴方が今から行く世界では、貴方は八神はやてと言う少女の家に居ます。その少女と貴方は一緒

に住んでいます。その家には、シグナムと呼ばれている女性、シャマルと呼ばれている女性、ヴィータと呼ばれている少女、ザフィーラと呼ばれている狼^{男性}が居ます。最後に、貴方には子供になってもらいます。それでも…良いですか？」

「一気に色々言われて、少し混乱してますが…別に構いませんよ。」

僕が答えた瞬間、僕の身体が光に包まれて、子供（約9歳頃）の姿になっていた。

女神「それでは… この？扉？をお通りください。」

そう言うとき女神は、？白い扉？を出現させる。

女神「それでは…行つてらっしゃい。アレン君。」

そして僕は答える。

此処には、もう、二度と来れないかもしれない。

アレン「行つてきます。？女神？。」

そう言うと、僕は？扉？を潜った。



一話

一話

「行きますよ！！シグナム！！」

「来い！！ウォーカー！！」

「はあああ！！」

僕は今、シグナムと模擬戦をしていた。

模擬戦は、外では危ないので、？方舟？の内部で行っています。

「クロス・グレイヴ
十字架ノ墓！！」

僕は、十字架ノ墓をシグナムに向けて放つ。

「何！？ くっ…！」

シグナムは、少し驚いていましたが、寸前でかわされました。

「くっ… 惜しかったですね…」

「まったく… 何でも有りだなウォーカー。しかし、私も負ける訳にはいかない…！」

「僕も負ける訳にはいきません！！イノセンス発動！！？六幻？！」

僕は、神田のイノセンスの？六幻？を発動します。

？六幻？等の『装備型』のイノセンスは、僕の？腕輪？に鎖で繋がっています。

この鎖は、僕以外（AKUMAやノア、一般市民のみ。仲間や友達、適合者は例外。）には触れない。

この鎖は動きの邪魔には一切ありません。

「…！ 剣か…レヴァンティン！！エクスプロージョン…！」

《エクスプロージョン!!》

シグナムの剣：レヴァンティンから、弾薬が排出されると、レヴァンティンが炎を纏う。

シグナムは、これで終わらせる腹ですね。

なら、僕だって…

「柴電一閃!!」

「?五幻 爆閃爪?!」

僕は神田の?五幻式?、?爆伯斬?と?裂閃爪?の、?爆伯斬?の斬撃を?裂閃爪?の斬撃に合わせたみたいな感じの斬撃を放つ。

しかし、その時…

「アレン君!シグナム!ご飯出来たで」

「はやて!?(主!?)」

ドガアーーン!!

僕たちの技がぶつかり合って爆発をする。

「わわっ!!」

はやてが車イスごと転びそうになります。

アレン「はやて!!」

僕ははやてを抱き抱えます。

アレン「大丈夫ですか？はやて。」

はやて「う…うん…大丈夫だよ…／／／／」

はやてが顔を赤くしています。
僕…何かしましたっけ？

ブルッ!!？

さ、寒気が!？

「すみませんはやて。言ってくれば手伝ったんですが…」

「別にいいんですよ。さ、行こうか。」

「「はい。」」

僕たちは、？方舟？から出ました。

？方舟？を出た僕たちを出迎えたのは、赤髪の少女と、金髪の女性、青い狼だった。

「あ！ おーい！ はやて！ アレン！ シグナム！」

「あ。ヴィータ。」

はやてが言う。

「ヴィータ。出迎え、ご苦労様です。」

続いて僕とシグナムが。

「ヴィータ。出迎えご苦労だな。」

「おう!! アレンとシグナムは、また模擬戦やってたのか?」

「「はい。(ああ)」」

ヴィータの問いに僕たちが答えると、ヴィータ、はやて、シャマルの三人が苦笑いしていた。

「そう言えば…アレン君。後で…《またAKUMAが…》」

「《なるほど…》わかりました。」

「しかし、たくさんいますね。」

「そのような。ウォーカー、何か案は無いか？」

「そうですね…じゃあ、僕がやります。皆は、少し離れててください。」

「了解。《了解した。》」

シグナムたちが、僕から離れた事を確認する。

さて、始めましょうか。

「さて、どうしましょうか？（ここは？炎羽？を使って…いや、？
炎羽？じゃ駄目だ…だったら…）…？六幻？発動…『二幻式』？二
幻刀？。」

僕の両手に六幻が握られる。

「…僕の魔力を吸い高まれ？六幻？　？禁忌　三幻式？【これよ
り刀は魔力を代価に主に力を与えよう。】」

僕は、？禁忌　三幻式？を発動する。

シャルから聞いた話ですが、僕は魔力値が^{測定不能}EXランクらしく、魔法を使っても全然疲れない。

だから、？禁忌　三幻式？の代価を魔力に変更したんです。

「いきますよ。？六幻？。？二幻　八花螳螂？！！」

僕は八つの斬撃をAKUMAたちに向かって放つ。

『ぎゃあああああああ！！』

『なんだ！？　うわあああああああ！！』

『ぐおおおおおおお！？』

AKUMAたちは、数が半分消えました。

『エクソシストか！！レベル１！！』

『おおおおおおおー！ー！ん！ー！！』

レベル１は、僕に向かって『砲撃（血の弾丸）』を無数に放ちます。

「（とりあえず…シグナムたちが来るまで、防いでましようか…それが良いですね。）とりあえず…？盾？…【現れる】！！」

僕の目の前にいくつもの？盾？が現れる。

？盾？は、？血の弾丸？を全て防ぐ。

「ん？これは…《シグナムですか？》」

「《むっ…やっと繋がったか。ウォーカー、すまない。今しばらく、そこで待っていてくれ。》」

「《どうしたんですか？シグナム。》」

「《実は、こっちにも数体AKUMAが居てな。少し手こずっていた所だ。》」

「《なるほど。わかりました。大丈夫です。こっちは、？盾？で全部防いでますから。》」

「《すまない。ウォーカー…》」

「《いえ、大丈夫ですよ。》」

僕はシグナムと？念話？を切った。

「シャル！！お前は、ここに残れ！！私とヴィータ、ザフィーラの三人でウォーカーに、合流する。いくぞ！！ヴィータ、ザフィーラ！！」

「おう！！《承知した。》」

私はヴィータ、ザフィーラを連れて、ウォーカーがいる場所へと向かう。

「はあああ！！柴電一閃！！」

「おりゃあああ！！シュワルベフリーゲン！！」

「守護の拳！！」

シグナムの剣が、ヴィータの鉄球が、ザフィーラの拳が残りのレベル1～3を全て破壊する。

「これで終わりですね。」

そう言っただけで今日が終わった。
長い1日だった。

二話

二話

「すう…すう…」

「ふわぁ…………おはよう…って…あれ？ まだ、誰も起きてないんか？ あの早起きのシグナムとアレノ君まで寝とるなあ… そっか。昨日、遅かったんやな。」

私は、隣で寝ていたアレノ君に毛布をかけて、私は車イスに乗って部屋をでます。

因みに、私はアレノ君と、一緒に寝ています。

「あれ？ シャマルやザフィーラ、ヴィータまで起きてないなんて

な。昨日、そんなに遅かったんかなあ……………まあ、朝御飯でも作ってようかな。」

私はそう言って、朝御飯の準備を始めます。

「……………ん…？ あれ？ はやて…？」

僕ははやてを探しますが、はやては、部屋にはいませんでした。

「あれ？ はやては…もう起きてるんでしょうか？」

僕はそう言って身体を起こした。

僕は廊下に向かうと、シャルが急いでいた。

「おはようございます。シャル。」

僕は急いでいるシャルに声をかける。

「あ、おはようございます。アレン君。すいません!! 実は今、急いでいますので、すいません!! また後で!!」

シャルは、急いで階段を降りていった。

「…か…かなり急いでましたね…シャル… ヴィータを起こしにいきましょうかね。」

僕はヴィータの部屋に向かいます。

「失礼します。ヴィータ?」

僕はヴィータの部屋に着くと、ヴィータを起こします。

「ヴィータ。起きてください。」

「ううーん……………ふわあ? アレン…? おはよう……」

「おはようございます。さあ、はやてたちが待っていますよ。」

「…うん…いこ…」

「あはは… まだ、かなり眠そうですね… ヴィータ。いきましよう。」

「…おおー…」

「…あ…あはは…」

僕は苦笑いを浮かべながら、部屋を後にする。

「はやてちゃん…！すいません…！寝坊しました…！すぐに手伝います…！」

「そんなに急がんでも良いよ。」

「…うん　おはようございます。主。」

「おはようさん。シグナム。ザフィーラもな。」

《おはようございます。》

皆が起きて、一階のリビングに集まっていました。

「おはようございます。はやて、シグナム、シャマル、ザフィーラ。」

「…おはよう…はやてえ…」

「おはようさん。…ヴィータ凄い眠そうやな…お風呂入っといで。」

「…うん…」

はやてに言われて、ヴィータは、お風呂に入りにいきました。

「シグナム。後で…《今日も特訓。よろしくお願いします。》」

「ああ。わかった。《よかろう。私で良ければ、付き合っぞ。》」

「ありがとございます!!」

そう言っ僕は頭を下げる。
それから数時間後…

「始めから飛ばしていきますよ。？五幻式？！！」

僕は始めから？五幻式？を使います。
因みに、？六幻？は使ってません。？神ノ道化？です。？退魔ノ剣
？を使っています。

「！！ ならばこちらもいくぞ！！ レヴァンティン！！」

《エクスプロージョン！！》

シグナムの剣…レヴァンティンは、炎を纏う。

「そう言えば…シグナムのソレ、どうやってるんですか？」

炎熱変換

「コレか？ 私の場合だが… 私は『炎を纏わせる』イメージだな。」

「なるほど…」

少しすると…

「あ、出来ました。」

アレンの？退魔ノ剣？が、純白の？炎？を纏っていた。

「凄い才能だな…しかし、これでまた、ウォーカーとの模擬戦が辛くなるな…（だが、これはこれで面白いかもしれん…ふふふ…）」

アレンは、あっさりと使いこなしていた。

「いきますよ… シグナム！！ ?破壊ノ咆哮？！！」
デス・ボール

僕はシグナムに向けて、 ?破壊ノ咆哮？を放ちます。

「！！ デカイ！！ うわあ！？」

シグナムは、危ない所でかわすも、少しかすってしまふ。

「…なんと…だが…フッフ…燃えてきたぞ…いくぞ！！ ウォーカ
ー！！ 貴様の力を見せてもらおう！！」

「はい！！ いきますよ！！ シグナム！！」

「こい！！」

こうして、僕とシグナムはぶつかり合います。

「はあああ！！」

キキイン!!

シグナムと僕は何度も切り合う。

「フレイム・ブレイド
? 炎ノ剣?!」

「紫電一閃!!」

僕の? 炎ノ剣? と、シグナムの紫電一閃がぶつかり合います。

バキイン!!

相殺する。

「今日は・・・これで終わりました。」

「ああ。今日は、これが最後だ。」

僕たちは、同時に構える。

「『属性変換』属性、『雷』！！
？ジャムフウル雷龍？！！」

僕は？雷の龍？を放ちます。

因みに、？雷龍？を放つ時、今回は？神ノ道化？の？退魔ノ剣？だからですが、？退魔ノ剣？を（主に地面に、足場がなければ空中等）突き刺します。

「飛竜一閃！！」

シグナムは、飛竜一閃を放ちます。

僕たちの技がぶつかり合って爆発をします。

ドガン！！

そして、ほぼ同時に僕は？退魔ノ剣？を、シグナムはレヴァンティンをお互いの喉元に突きつける。

「…引き分け…ですかね？」

「…そのようだな。」

こうして、僕とシグナムの模擬戦は、終了しました。

そして僕たちは、方舟から出ます。

「終わりましたよ。　《シグナム。　そっちはどうですか？　…シグナム？》」

「《ウォーカー！！　すまんが、今すぐ援護に来てくれ！！》」

「《！？　わかりました！！　すぐにいきます！！　それまで耐えてください！！》」

「《すまない！！》」

僕は急いでシグナムの元へ？方舟？で飛んだ。

Vertical line of text or a page number on the right side of the page.

三話

三話

「ハア… ハア… くっ… しまった… 完全に… 油断していた…
（しかし… ウォーカーがくるまで… しのぎきる！！）」

私は荒々しく息を吐いていた。

だが、まだこんなところで倒れる訳にはいかない！！

主を幸せにするまで！！

そして…

ウォーカーとの約束を守るために！！

私はそう心に決めていたが、正直もう、限界だった。

しかし、次の瞬間――

ズバン！！

私の目の前に迫っていたレベル3が数体、切り裂かれる。

「……………持ちこたえた…後は…頼んだぞ…ウォーカー…」

私は？少年？に向かってそう言った。

「……………任せてください。シグナムは、のんびりしててください。いよ。コイツらは、任せてください。」

少年は、笑って答える。

「……………任せたぞ…ウォー…、カー…」

私はそう言った後、気を失った。

「ご苦労様でした。シグナム。……………僕の？大切な人？をよくも…許さないぞお前達」

そう言って僕はレベル3に向かって行く。

「じゃあ… 『新しい技』を試みましょうか。 ? 神ノ道化?!
! 発動!! いくぞ!! レベル3!!」

『エクソシスト!! 迎え撃て!!』

「? クロス・フレイム 十字架ノ炎?!」

僕は? 十字架ノ墓? に『属性変換』の『炎』を使って? 十字架ノ炎?
? を放つ。

喰らったレベル3は、次々に燃えていく。

「なるほど…じゃあ、次はコレだ。 ? 炎? 『具現化』? 右腕?。」

僕の右腕は純白の炎を纏う。

「はあああ！！　？放出？！！」

僕は右腕の？炎？をレベル3に向かって？放出？する。

喰らったレベル3は、徐々に？灰？になっていく。

「なるほど…　ぐっ…　シグナムを背負って戦ってるから、少し疲れる…　でも…　これで…　終わりだ！！　？炎？『具現化』？纏い？。」

僕は？身体？に？純白の炎？を纏う。

「【放て。　全てを灰に変える？白炎？】　？殲滅の炎？！！」

僕の？身体？から、？純白の炎？を放つ。
レベル3は、全て灰になって消えました。

「……………これが…？大切な人？を傷つけられた痛みだ！！」

Vertical line of text on the right side of the page.

四話 ？レベル4？

四話 ？レベル4？

「！？ ……どうして…どうしてここに…お前がいるんだ…！？
？レベル4？！！ ……！まさか…！！」

「ふふふ…残念ながら…？伯爵様？は『この世界』には…来ていら
つしゃらない。我々を産んでいるのは？卵？^{フランド}ですよ。」

僕の問いに？レベル4？は答える。

最悪だ… レベル1〜3ならまだしも… ？レベル4？がいるだ
んな…！

シグナム達は大丈夫なのだろうか…

「いきますよ。『アレン・ウォーカー』」

「今は…考えても仕方ない…いくぞ!! ?レベル4?!!!」

僕と?レベル4?は?戦闘?を開始する。

「レベル…?4?…だと…!?!」

「コイツが…?レベル4?…? ?なんか、思っていたより…小さいな。」

気をつける。二人共。ウォーカーの話では、奴は小さいながら、^{スペック}基本値は、レベル3より何倍も高く、以前のウォーカーを一撃で再起不能まで追い込む程らしい。》

ザフィーラの言葉に二人は驚く。

「何！？ ウォーカーを一撃で…再起不能だと！？」

「嘘だろ…コイツ…そんなに強いのかよ…人は見かけによらねえなあ…」

「ふふふ… さあ、かかってきなさい。 『アレン・ウォーカー』の仲間達。」

？レベル4？は挑発してくる。

「おのれ！！ いくぞ！！ ヴィータ！！ ザファイラ！！」

「《おう！！！！》」

私たちは、？レベル4？に向かって行く。

「うおおお!! ? 五幻式?!」

「アレ? どうしてキミ、他のイノセンスを使えるの?」

「お前が自分で考えろ!! ? レベル4?! ? 爆雷爪?!」

僕は? 雷? を纏った? 爆閃爪? ? 爆雷爪? を? レベル4? に放つ。

「うわあああああ!! くそ...
身体が半分に
くそ!! 『アレン・ウォーカー』!!」

? レベル4? は僕に突っ込んでくる。

っていうか、まだ動けたのか!?

「うわあ!!」

ドガン!!

僕は地面に叩きつけられる。

..... しまった... 頭を地面に叩きつけた... 頭が... 揺れて... 気が
..... 遠くなる.....

「よく頑張ったけど……これで終わりだね。さようなら。『アレン・ウォーカー』」

「……………（二ヤリ）」

僕は？レベル4？ に気づかれないように小さく笑う？。

すると――

シュー……………

溶けるように？僕は消えた。

レベル4「……………！！？ どこだ！？ どこにいる！？」

？レベル4？は、辺りを見渡すが、アレンの姿は見えない。

「おのれ……！！」

「？白炎？『纏い』？右腕？」

僕はあの時の？白炎？を右腕に纏わせる。

レベル4「!?!? 上か!! な?!?!? なんだ?!?!?」

?レベル4?は、僕の?右腕?の巨大な?白炎?を見て、驚く。

アレン「.....

...【全てを灰に成せ】劫火?白炎?」

僕は?巨大な炎?を?レベル4?に向けて放つ。

レベル4「な?!?!? う?!?!?うわあああああ!?!」

?レベル4?は、?灰?になって消えた。

「……………がはっ…強い…全くはが立たない…!!」

《ぐっ…動けん…!》

「げほっ!! くそ…アイツの防御…ちつとも壊せねえ…!!」

「もう終わりですか？ 張り合いがないですね。 …… まあ、良いでしょう。 さようなら『アレン・ウォーカー』の仲間達。」

シグナム達は、目を瞑る。

しかし、いくら待っても痛みが来ない。

目を開けるとそこにいたのは…………

アレンだった。

「『ウォー…、カー…?』」

「ア…、レン…?」

「『アレン・ウォーカー』!! 見いいいっとううけええええたあああ
あ」

「?レベル4?… よくも… 僕の?大切な人?を… 許さないぞ
!! お前ええええ!!」

僕は？六幻？を振るう。

しかし、？レベル4？は、軽々と避ける。

「さようなら。 また会いましょう。 『アレン・ウォーカー』」

そう言って？レベル4？は、その場から消えた。
そして、僕は気を失う。

五話

五話

僕は今絶望しています。

目の前に笑顔で紫色の… パスタ（煙出てます。）を手に持ったシヤマルがいるからです。

ザフィーラは気絶しています… 理由は、シヤマルのパスタが原因です。

ザフィーラは気絶間際に『すまない…シヤマルを…止められ…なかった…すまない…ウォー…、カー…ガクッ…』と言ってました。

ザフィーラ…… シヤマルを止めようとしてくれたんですね……

早く来てくれはやて！！ シグナム！！ ヴィータ！！

「シャル…それは…？」

「コレですか？ 腕に寄りをかけて作ったパスタです」

やっぱり…、パスタなんだ…

「はい。 あーん。」

「……………（覚悟を決めましょう…マナ…今からそちらに行く事になるかもしれない…） あ…あーん…」

その時

ドタドタ……………

バンツ！！

「シャル！！ 駄目や！！ アレン君に？ 毒？を食わすきか！！」

「酷いです……！！ はやてちゃん……！！」

「アレン……！ 大丈夫か……？」

「ザフィーラ！！ 大変だ！！ ザフィーラが意識不明だ！！」

「はやて！！ ヴィータ！！ ありがとう！！ 鎖を外してください！！」

「うん！！（おう！！）」

僕は鎖を外してもらう。

「ありがとう。 ザフィーラ！！ ？癒しの水？」

《……………うう…ウォーカーか…？ すま
ない…》

「良かった… シヤマルの手料理だからわからなかったんですね。
回復するかどうか。」

「アレク君まで……………！！」

それから三日たったある日の夜。

「散歩してきます。」

「散歩か？ 付き合っぞ？」

「大丈夫ですよ。すぐ帰ってきます。」

そう言って僕は、家を出る。

「イノセンス発動。」

タイムレコード
？刻盤？

ターゲット
対象空間を包囲。

タイムアウト
？時間停止？。

「

八神家に「時間の壁」を張る。

さてと、いきましようか。

「……………奴は何者だ？」

「……………わからんな。つけてみるか。」

「よし。行くぞ。」

彼らはアレンを追いかける。

「さて… 貴方達は… 一体誰ですか？」

「……… 何時から気づいていた？」

「？時間停止？をする前からですね。 …… いや正確にはもつと前からですね。」

「ならば警告だ。 『闇の書』の主、八神はやてには関わるな。」

「（『闇の書』？ なんだろう…でも）それは無理な相談ですね。」

「「何？」」

「僕は…はやての家族ですから。」

「「ならば、貴様を排除するのみ！！」」

「やれるものなら、やってみてください!」

そして僕達は、戦闘を始めた。

「はあああ!!」

「効きません!! ? 道化ノ帯?クラウン・ベルト!!」

僕は? 道化ノ帯? を伸ばして『仮面の男達』を捕まえる。

「な!? 外せない!? 『バインド』じゃないのか!」

「あたり前です。 ? 道化ノ帯? は、あなた方の言う『バインド』ではありません。 『バインドブレイク』は出来ませんよ? さて
… もうはやて達に近寄るな。 これができないなら… 今すぐ消

します。」

そうやって僕は『仮面の男達』を？道化ノ帯？から解放する。

「さようなら。 良い夢を…」

そうやって僕は、その場から離れる。

「アレン君… 今良いかしら？」

「ええ。 良いですよ。 お久しぶりですね。 元気でしたか？
？女神？。」

「ええ。 アレン君。 一緒に来てもらえますか？」

「はい。 わかりました。」

そう言っ僕は？女神？についていた。

天界

「座って構いませんよ。」

「ありがとうございます。あの…貴方は？」

「ウォーカーさん…えと…あの…こ…こんばんは。私には？女神様？の秘書を勤めます、？光？ともうします。」

「あ…どうも。？光？と呼んでも良いですか？」

「どうぞ。」

「それでは…アレン君。貴方は…イノセンスを使った時、何か違

和感を感じませんでしたか？」

「違和感…ですか？ ……そう言えば…今日、？時間停止？を使った時もそうでしたが…『声』が聞こえました。」

「『『声』？』」

「はい…こんな感じです。 【我らの『声』を聞け】…だったと思います。」

六話

六話

「イノセンスの…『声』…（もしかしたら…アレン君のイノセンスは…更なる『進化』を遂げるかも知れない…） 光！！」

「はい。 ウォーカーさん。 私についてきてください。」

「……………？ はい。 わかりました。」

そう言っ僕は？光？についていった。

僕は今『天界』の『訓練所』みたいな場所に来ていた。

「あの…ここは？」

「ここは…まあ、『訓練所』だと思ってくれて良いです。」

「あ、？女神？」

「？女神様？………では…失礼します。」

「はい。ご苦労様でした。光。」

「…………？」

「アレン君には今から？戦闘？…戦ってもらいます。」

「誰とですか？」

「？彼？とです。アレン君気をつけてください。？彼？は、とても強いからです。」

「貴様が私の相手か。」

声の方に向くと、青髪のシグナムそっくりの男の人がいた。

「シグナム？ いや…違う…」

「ほう…貴様の世界では『シグナム』なのか。よかろう。私の名はシグナムと呼べ。」

「あ…はい。わかりました。？シグナム？」

「さて？女神？。この小僧の？覚醒？が終わるまで、小僧は私と？修行？^{戦闘}だな？」

「はい。そうです。」

「小僧…！」

「あ…、はい…！」

シグナム「いくぞ？」

そう言った瞬間、？シグナム？が消える。

アレン「……………！？神ノ道「遅い。」な…！？「驚く暇があるのか？ずいぶんと？余裕？だな。はっ…！」うわあ…！」

ドガンー!!!

僕は？シグナム？に蹴り飛ばされて、壁に激突する。

「……………！？ 見えなかった…しかも…かなり？速い？……」

「？速い？…か。今の私が？速い？のならば…小僧。貴様はとてつもなく？遅い？ぞ？」

「だったら…「ほう？ 立ち上がるのか？ しかし良いのか？ 立ち上がる。と、言うことは… また？絶望？するかも知れないと言うことだぞ？」わかってますよ…？白炎？『纏い』？身体？！」

「ほう？ それが… 貴様の？力？か。 「いきますー！！」 よかるう。 来い！！」

僕は？シグナム？とぶつかり合う。

バキーン！！

「ほう？ さっきよりは？速い？ではないか」

「くっ…！！ （？白炎？を『纏い』ながら？五幻式？も使ってるのに… まだ追い付けない…） うおおおー！！」

【……………】

「むっ…？（なんだ？この『声』は…イノセンスか？）」

「誰だ！！『声』の主は誰なんだ！！」

「何？（『声』の主がわかっていないのか？）」

【我らの『声』を聞け】

「誰なんだ！？お前は誰だ！！」

僕の意識はそこで途切れた。

「入ったみたいだな。？結界？」

私はウォーカーの周りに？結界？を張る。

《うう… ここは…？ 何も無い… 白い世界？》

【我らの『声』を聞け】

《また…！！》

【【我らの『声』を聞け】】

《今度は…複数…、……………あなた方は誰ですか？》

【【我らは貴様の持つ『イノセンス』なり。そしてここは貴様の『精神世界』なり。】】

《『精神世界』？》

【【左様なり。我らは貴様がここに来るのを待っていた。さあ？我らの『名』を呼べ。我らの… 正しき？名？を。さあ。】】

《正しき？名？…？》

「じゃあ、？覚醒？は一つすれば良いんですか？」

「ああ。一つ？覚醒？すれば、その一つに反応して、残りは全て？覚醒？する。まるで、『イノセンス』の？核？である？ハート？が破壊されるみたいにな。」

「なるほど…（アレン君、頑張つて…）」

《貴方の？名？は…？^{クワウン}白い道化？。》

【……では…貴方に？僕ら？の？覚醒？の？力？を授けます。】

《？僕ら？？　って言うか…僕の『声』？。》

【あたり前です。　？僕？は貴方の言う？神ノ道化？…貴方の元々

の『イノセンス』だからです。」

《えー!? 貴方が…? 神ノ道化? …!?!?》

【…………アレン? ? 僕? の名前は?】

《あ…すみません…? 白い道化?》

【よろしい。】

【おい!! ? 白い道化?!?! 次は俺達だぜ?】

【そうそう。】

【ああ。 すみません。 ? 六幻?。 ? 鉄槌?。】

《? 六幻? に? 鉄槌? … 神田にラビの『声』がする…》

【さて… ウォーカーそろそろ『精神世界』が消える。 お前の意識はあつちに戻る。】

《え? あ、はい!》

【へ? 俺は? 俺の番は?】

【貴様の出番は無い。】

【酷!?!】

僕の意識がまた、薄れていった。

ピシッ…ピシピシッ…

シグナム「ん？ やつとか。」

ピシピシッ…

バリイン！！

私が張った？ 結界？ が破れる。
やつと？ 覚醒？ したか。

「？ 覚醒？ は終わったのか？ ウォーカ―。」

「……………ええ。 たった今『精神世界』から帰ってきましたよ。 ？ 相棒？ 達と共に。」

「ふむ。ウォーカー。お前がここに来てから既に一週間経っている。」

「え… ええ！？ もう一週間経ってるんですか！？」

「ああ。 そうだ。 ではな。 ウォーカー。 また会おう。」

僕の足元に突然？穴？が現れる。

当然ながら僕は落ちた。

七話 『開幕ベル』（前書き）

シーザス「今回は、喧嘩から始まります。」

七話 『開幕ベル』

七話

「……………ヴィータ…話を…」

「うるせえ！！ お前なんかもう知らねえ！！ 二度とあたしらの前に姿を現すな！！ こんな物…もう要らねえ！！」

ブチッ…

バリィン！！

ヴィータは、首にぶら下げていた？白いグラーフアイゼン（待機状態）？を引きちぎり、地面に叩きつけた。

？白いグラーフアイゼン？は碎け散ってしまった。

「……………！……………ヴィータ…」

「「ヴィータ！？（ヴィータちゃん！？）」

「ふー…、ふー… さつさと出ていけ！！ 次に出たらあたしらは敵どうしだー！」

「……………ヴィータ」

「……………」

「……………ヴィータ…貴方がそのつもりなら…僕は出ていきます。」

「「ウォーカー！？（アレン君！？）」

「……………」

「ヴィータ…シグナム…シャマル…今までありがとございました。」

「さつさと出ていけ！！ ぶっ飛ばされてえのか！？」

「ヴィータ…、一つだけ言っておきます。 貴方達が危険に去らされた時、僕は貴方達の前に現れます。 その時は…敵どうしですね。」

「危険に去らされた時？ あたしらが…弱いつて言うのかよ！？」

「そうです。」

「ウォーカー！！ 貴様……！！」

「《シグナム…僕は貴方達を巻き込みたくは無いです。」「《ウォーカー？》」お願いします。今は演技をしていてください。シヤマル。貴方をお願いします。」「《分かったわ。》」「因みに…ヴィータは演技なのを知っています。《さようなら。》」

「…………アイゼン！！ シュワルベフリーゲン……！！」

「…………！！ ？白い道化？……！！」

ヴィータのシュワルベフリーゲンを？白い道化？で防ぐ。

「紫電一閃……！！」

「紫電一閃……！！」

シグナムの紫電一閃を紫電一閃で相殺する。

「素直に行かせてはくれないみたいですね。」

「はあああ……！ 守護の拳……！！」

「ザフィーラですか……？ 十字架ノ墓？……！！」

ザフィーラの守護の拳を？十字架ノ墓？で相殺する。

「？咎人達に、滅びの光を。 星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。
？ 貫け、閃光！ スターライトブレイカー！！」

「「《な！？ う… うわああああああ！！》」」

僕のスターライトブレイカーは、？方舟？の内部を揺らす。

「…………… 流石ですね。 シグナム。 でも… さよならです。」

「ハア… ハア… 飛竜一閃！！」

「？天針？！！^{＜フンコンパス＞} 加護の針 東ノ罪！！」

「ラケーテンハンマー！！ ぶち抜けー！！」

《はあああ！！ 守護の拳！！》

僕は三人の技を加護の針 東ノ罪で防ぐ。

「ち… ちくしょう…」

「ぐっ… うぐう…」

《うう…》

「もう…最後ですよ。呪縛の針 北ノ罪!!」

「『《うわあああああ!!?》』」

僕は三人を無数の針で拘束する。

アレン「さようなら。」

「沢山いますね…レベル3。 ?六幻?!」

【了解!! ……………完了。ざつと100体だな。】

「了解。いきますよ?六幻?。 ?六幻式?!」

僕の服装は、BLEACHの白一護の卍解時の死覇装に？白い道化？のマントを羽織った服装に変わる。

手には、？白い六幻？（教団壊滅後）を持っている。

因みに、言葉使いは神田になっています。

「開幕ベルを鳴らせ。　？千爪牙・影？！！　？千爪牙・突き？！
」

レベル3の？影？から無数の剣（爪？　牙？）が現れてレベル4を切り刻む。
俺は？六幻？を突き出す。突き出した？六幻？から、無数の斬撃が放たれる。

『何！？　エクソシストか！！』

「いくぜ。　レベル3！！」

俺はレベル3約100体に向かっていく。

「では、ウォーカーはその戦いに我々を巻き込みたくなかったと、言う訳かなのか？」

「うん。だからあたしは、アレンと話合って今回だけは、はやてと一緒にいる。っていう事で、あの演技をやってたんだ。」

「なるほどな。」

「はあああ！！ ？ 咎人達に、滅びの光を。 星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。 ？ 貫け、閃光！ スターライトブレイカー！！」

『ぎゃあああああああああ！！！！』

スターライトブレイカーで半分（約40体位）が消滅する。

「？六幻？！！ 残りは！？」

【ラスト20！！】

【六幻】「了解。 さて、締めだな。 ？雷光一閃？プラズマザン
バー！ ？響け、終焉の笛？ラグナロク！ ？全力全開？スターラ
イト！ ？？？ブレイカー？？？！！！」

俺の？トリプルブレイカー？が^{残り}レベル3にあたる。 ^{残り}レベル3は消滅する。

八話 新たな強敵

八話 新たな強敵

「終わったな。 さて…帰るか。」

カラン…

何かを蹴った。
小さな何かだ。

「……………何だ？ これ？ ……………？^{ゼロ}0？？ ……？ レベル0？？ 何だ
コレ？ ……？ レベル0？ か…少し、調べてみる必要があるそうだな。」

俺は、落ちていた？0？と書いてある板を拾う。

「？千爪牙・突き？！！」

俺は、岩に向かつて？千爪牙・突き？を繰り出す。

ドガァン！！

スタツ…

「誰だ！！ 貴様。 （人…？ いや… 違う。 多分こいつが…
？レベル0？）」

「いやぁ… 危ない、危ない。 危つく斬られるかと思ったよ。
はじめまして… だね？ 『アレ・ン・ウォーカー』。 僕は？レベ
ル0？。」

「やはり、貴様が？レベル0？か。 …… 悔しいが… 今の俺の力
では… まだ貴様には勝てない… 不本意だがな…」

「へえ… わかってるんだ… 驚きだね。 さようなら。 『アレ
ン・ウォーカー』 次にまたお会いしましょう。」

そう言つて？レベル0？は消える。

「……………？レベル0？…か…なあ…？六幻？。 ……？白い道化？。」

【強いぜ。　？奴？は。】

【そうですね。　？奴？は…強いですね。　今のままで勝てるかどうか…】

「…………やはりそうか。　ぐっ…くそっ…アイツ…どれだけ距離^{リーチ}長
いんだよ…まさか…軌道を変えるだけで精一杯とはな…」

【まさか…俺と？白い道化？が反応出来ない速さとはな…】

【すみません…アレン…僕の領域^{テリトリー}に入ったのに動けませんでした…】

「謝る事はないよ。　マズイ…意識が…」

【ウォーカー！！？】

【アレン！！？】

ドサッ…

俺の意識は闇に落ちた。

プルル… プルル…

ガチャ。

「はい。」

【その声… ヴィータか!？ はやてを呼んでくれ!-!】

「? 六幻? か? 待っててくれ。今はやてを呼ぶからさ。」

【できるだけ速く頼む。】

「あいよ。はやて-? 六幻? が変わってだつてさ。」

「はい。お電話変わりました。」

【はやて!-! よく聞いてくれ。……………

…だ。できるだけ全員で来てくれ。…………… たのんだ。】

「大変や… ヴィータ!! シグナム!! シャマル!! ザフィ
ーラ!! 出かける準備して!-!」

「「「《はやて? (主?) (はやてちゃん?)》「「「」

「病院にいくよ!!」

「病院… ですか？」

「そつや!! 海鳴大学病院!!」

はやての言葉に全員が驚く。

ピッ… ピッ…

ガラッ…

【失礼する。 ？白い道化？。 ウォーカーは…いや…ウォーカーの容体はどうだ？】

【？六幻？ですか…なんともいえませんよ…そつえば…はやて達

【連絡は？】

【連絡はした。いつ来るかはわからんがな。】

【そうですか…ありがとうございます。？鉄槌？…寝てしま
いましたよ。『戻れ』】

？鉄槌？は、アレンの？腕輪？に吸い込まれるように消えた。

【まさか…意識不明の重症とはな。】

【ええ…僕達が不甲斐ないばかりに…主…アレンをこんな目に会わ
せてしまった…いくら？六幻？の『再生能力』でも…一週間はかか
るでしょうね。】

【まあ…仕方無いだろうな…元々は、目を覚ますまで四年はかかる
って話だったからな。……………？白い道化？？泣いてるのか？】

【はい…自分の弱さが…自分の未熟さが…アレンを守れなかった自
分の不甲斐なさが…許せなくて…】

【……………俺は…何も言えないけどさ…ウォーカーなら…こう言っ
つんじゃねえか？いや…あの言葉『立ち止まるな歩き続ける』…多分
ウォーカーが起きていたら…間違いなく…言っていただろうな。】

【……………！『マナ』との…『誓いの言葉』…】

足音が聞こえてきた。

タッタッタッタ……

ガラッ！！

「「「アレン君！！（アレン！！）（ウォーカー！！）「「「

入ってきたのはやて達だった。

【…… 病室だぞ？ もう少し静かに出来ないか？】

【？六幻？の言っている事があっていますね。】

「「「す…… すみませんでした……「「「

【【わかったのならばよろしい。（わかったのならば良い。）【】

「四年！？ アレン君は… そんなに酷い重症なんか…？」

はやてが涙を浮かべながら、俺と？ 白い道化？ に問う。

【医者の話によればな。 ？ 俺？ の『再生能力』を使っても一週間はかかるな。】

【…………… もうすぐ？ 冬？ ですからね。 それまでには完全に回復するでしょう。】

はやては安心したのか、一気に力が抜ける。

「……………！！ つつ… はあ…………… 良かった…」

すると――

ガシッ…

アレンの腕が？ 白い道化？ の腕を掴む。

「…………… 【え…？】 ……」

「…………… 皆… 心配かけて… すいません… でした…」

「『『『【アレン…（アレン君…）（ウォーカー…）】』』」

「笑って…くださいよ…はやて…ヴィータ…シグナム…シャマル…綺麗な顔が…台無し…ですよ…」

「『『『／／／！』』』」

【???（なんで顔を赤くしてるんだ？）】↑理由がわかってない。

【フッフ…（なるほど…皆アレンに惚れましたね。）】↑理由がわかってる。

「？六幻？…僕が目覚めたから…『再生能力』は…」

【ああ。お前が目覚めたから『再生能力』でいつも通り回復する。大体…一週間位だろうな。】

九話 リハビリ！！

九話 リハビリ！！

アレンが目を覚ましてから二日がたった。

今アレンは歩く練習をしていた。

理由は？レベル0？の攻撃によるものである。

そのため、歩く時は車イスを使っている。

「うつ… ふう… なんの… これしき…！」

一歩、また一歩、と歩く度に激痛が走る。

しかし、それは全て気合いと根性でなんとかこなしている。

【アレン！ もう少しですよ。 頑張ってください！！】

「もう… 少し…！ 後… 三歩… 二歩… 一歩… やったー！
！ 歩ききったー！！」

喜びに感動してついジャンプ（どうやったんだ…？）してしまい、
足に物凄い衝撃が走る。

「……………！！ あ… あがが… 足がぁ…」

【なにをやってるんですか… アレン…】

？ 白い道化？ に飽きれ顔をされてしまう。

？ 白い道化？ に手伝ってもらって車イスに乗る。

「はぁ… 解放された… 後、どのくらいで足… 回復しますかね
？」

【そうですね… 後… 二日でいつも通りですね。】

「わかりました。」

外出許可も出てるし、今日は『図書館』にでも行つて来ましようかね。

図書館

「くう…と…届かない…！ はあ…はあ…（？白い道化？を連れてくれば良かった…）あと…少し…もうちょっと…」

そんな時だった。

「あー！？ 貴方は！」

「…へ？ …… あー！？ 君は…」

「あの時の？ 白い人？！！」

「あの時、シャマルに？ 収集？ されていた女の子…！」

「貴方のお名前を教えてください…！」

「じゃあ、僕が名前を教えたら、君の名前を覚えてもらつよ？ アレン・ウォーカーです。」

「高町なのはです。」

こうして、僕は少女高町なのはと出会ってしまつ。

「……………」

「私は…突然魔法に出会いました。そして、突然戦いに巻き込まれました。」

「……………」

「アレンさん…貴方は？」

「なのは…僕は九歳ですよ？」

「へ…？ ええー！！！？ 同い年！？」

「君は…？ AKUMA？を知っていますか？」

「？ AKUMA？…？」

「？ AKUMA？とは… 暗黒物質？ダークマター？を？核？として作られた？悪性兵器？… AKUMA？は？悲劇？と？魂？と？機械？を使つて作られています。貴方達も見たでしょう？ あの異形を…」

「……………あ……………」

「？AKUMA？には、それぞれレベルがあって弱い順番からレベル1、レベル2、レベル3、レベル4　そして？レベル0？。今まで一番強いのが？レベル0？。　僕もレベル4までなら倒せますが、？レベル0？は強すぎます。　僕も負けてしまいましたから…」

なのはは驚いていた。

「アレン君が負けるだなんて…」

「そろそろ戻らないと石田先生に怒られてしまいますので、僕はこれで…　また会いましょう。　高町なのは。」

そうやって僕はなのはから離れていった。

病室

「うつ…くう…」の…」

ガラッ…

「失礼する。 ウォーカー。 主からの差し入れだ。 『フルーツバ
スケット』だそうだ。」

「つつ！ あ…シグナム。 ありがとうございます。 いっ…！
！ ふう…」

「大丈夫か？ ウォーカー。 リハビリは順調か？」

「大丈夫です。 はい。 順調ですよ。 ？ 白い道化？の話では後
二日で完全に回復するそうです。」

「そうか。」

「はい。」

そんな話をしていると、？ 白い道化？ が皆を連れて入ってきた。
ガラッ…

『失礼します。』

「？ 白い道化？！ 皆！」

「アレん！！」

「あはは。 相変わらずですね。 ヴィータ。」

「ヴィータちゃん？ はやてちゃんの事、忘れてませんか？」

「あ…、ついでに言うとシャルも忘れてた。」

「「酷い!？」」「

「……………あれ？ はやて？」

「気がついたんかアレン君。 どうや？ 私歩けるようになったんだよ。」

「凄いいじゃないですか！ はやて！ 歩けるようになったんですね！」

「そうやで。 だから、アレン君も頑張つてな。」

「はい！」

それから二日後――

「やっと歩けるようになった――！――！――！」

【良かったですね。 アレン。】

【良かったな。 ウォーカー。】

「ははは。 嬉しそうだな。 ウォーカ―。」

「当然です!!」

――

十話 気になった事

十話 気になった事

「ハックションー！ うう…さ…寒い…」（ガチガチ…）

「だ…大丈夫か…ウォーカー…」（ガチガチ…）

「シグナムも…かなり…さ…、寒そう…で…ですな」（ガチガチ…）

「お前ら二人共… 寒さが嫌いだったな。」

「…コクコク…コクコク…コクコク…コクコク…コクコク…」

静かに頷く僕とシグナム… とにかく寒いです…

ブルブル…

「でも… どうして僕はヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの魔法を使えるんでしょうかね？」

僕の言葉に皆が「そういえば…」と吹いていた。

「確かにな。 私の紫電一閃、飛竜一閃、陣風、空牙、シュツルムファルケン、シュランゲバイセン、シュランゲバイセン・アングルフ、パンツァーガイストや…」

「あたしのギガントシュラク、シュワルベフリーゲン、テトーリヒ・シュラク、フランメ・シュラク、ラケーテンハンマー、パンツァーヒンダネス、フェアーテ、アイゼンゲホイルとか…」

「私の癒しの風、旅の鏡、風の足枷、風の護盾とか…」

《我の守護の拳、鉄壁の構え、牙獣走破、鋼の軛も使えるな。》

シグナム達は自分達が見える魔法を全て言う。

こうして聞くと色々な技（魔法）を使えるな… 僕。

【まあ、ウォーカーの？創造する力？の所載^{せい}なんじゃないか？】

【そうでしょうね。 いや… それ以外に考えられませんね。】

「そうですね。」

いつの間にか寒さを忘れていた僕達であった。

方舟内部

「？鉄槌?!?! ？判？劫火灰燼 直火判?!」

「紫電一閃!!」

ドガアアアアン!!

爆発が起こる。

「紫電一閃!!」

「紫電一閃!!」

ドガアアアアン！！

また爆発が起こる。

「これで……」

「最後っ！！」

一瞬の間を置いて

「飛竜一閃！！」

「飛竜一閃！！」

ドガアアアアン！！

大爆発をした。

その結果二人が目覚めたのは二日後だった。

十話 気になった事（後書き）

シーザス「ガンバリマス。」

十一話 始まるそれぞれの戦い。

十一話 始まるそれぞれの戦い。

「……………また…貴方に出会うとは…できれば…出会いたくなかったんですけどね…？レベル0？」

「ふふふ…お久しぶりですね…『アレン・ウォーカー』。少しは…できるようになりましたか？」

「さあ…わかりませんね。…少し？くらいは…できるようになっただんじゃないですか？」

沈黙。そして…

「「はあああ！ー！」」

ドンー！

力強く地面を蹴る。

ガキイイイインー！

ぶつかり合い、激しい火花が散る。

「ほう…ならば…始めましょうか。　？我々？の戦いを。」

【はっー！　　気に食わねえ奴だな。】

【良いじゃねえか。　　久々に良い『殺し合い』ができそうじゃねえかよ。】

【奴はかなりの強敵です。　俺達全員でかかってても勝てるかどうか…】

「それでも…　僕達は勝たなければならない。　何があっても…絶対にー！」

『おっー！ー！』

「いきますよ…　？皆？ー！ー！」

『おっー！ー！』

「迎え撃ちましょう… いきますよ。『エクソシスト』達。」

そして僕達の『戦闘』が始まる。

【？道化ノ帯？！！？十字架ノ墓？！！！】

？白い道化？が？道化ノ帯？で？レベル0？を拘束しながら？十字架ノ墓？を放つ。

しかし…

「効きませんよ。」

？レベル0？は無傷だった。

【くっ…】

【装填？原罪の矢？！！】

？断罪者？は？原罪の矢？を放つ。

「くっ…これは中々…効きましたね。」

【噓つけ!!】

【? 八花閃光?!】

八花閃光：閃光の速さで八花螳螂を計二十回斬りつける技。 アレ
ンと? 六幻? が使う技の中では中級クラス。

しかし…

「はあ!!」

? レベル0? は片手で防ぎきってしまう。

【な…!!? 片手…!!?】

【俺がまだいるぜえ? ? デデルーパ?!】

? 神狂い? は、持っていた? 刀? に炎を纏わせ? レベル0? に向か
って放つ。

「ギギギギギギギギ……!!」

？神狂い？の？デデルーパ？を？レベル0？は受け止める。

【マジかよ… あれを受け止めるのかよ…】

「？千爪牙・突き？！！」

俺は？レベル0？の後ろに回り込み、？千爪牙・突き？を放つ。

「なあ！！？ うわああああ！！！」

前と後ろからの攻撃で爆発する？レベル0？。

しかし…

【しぶといな。 まだ破壊されてなかったのか】

煙の中から現れたのは少し身体に傷を受けた？レベル0？だった。
ボディ

「そんな…俺と？神狂い？の攻撃を喰らって…ほぼ無傷だなんて…」

「甘いですね。 あのくらいで私がやられる訳ないでしょ？」

「？断罪者？！！ ？神狂い？！！ ？六幻？！！！」

【【【了解。】】】

三人は返事を返す。

「？千爪刃・鴉羽？！！」

【装填？原罪の矢？！！】

【？デデルーパ？！！】

【八花閃光！！】

レベル0「なるほど。 個々の技が駄目なら全員の総攻撃ですか。
良いでしょう。 受けきる！！」

ドガアアアアン！！！！

「どうだ…！？」

【煙で何も見えないな…】

【どう思います？】

【完全に…では無いが…少しくらいダメージにはなったんじゃないか？】

【同じく。】

霧が晴れるとそこには…

左腕が吹き飛んだ？レベル0？がいた。

「危なかったですね… 危うく消し飛ぶかと思いましたよ。」

【滅罪レベル三倍。 装填？原罪の矢？！！】

「？十字架ノ爪？！！」

十字架ノ爪「クロス・エッジ」：十字架ノ墓を？白い道化？の鍵爪の数（五本）十字架ノ墓を放つ技。 十字架ノ墓一つ一つの大きさには違いがある。 威力はアレンと？白い道化？が使う技の中では中級クラス。 主に攻撃に使用するが、防御技としても使える。

【？八花閃光？！！】

【？破滅ノ十字架？！！】

破滅ノ十字架「クロス・エンド」：破滅ノ爪の強化版。 遠距離、中距離、近距離の全てに対応できる技。 威力はアレンと？白い道化？が使う技の中では最強クラス。

【？デデルーパ？！！」

「いつまでもやられている訳無いでしょう？　？咆哮の壁？！！」

ギギギギギギギギイイイイ！！

ドガアアアアン！！！！

【あの野郎…？咆哮の壁？とか言う技で俺達の技を防ぎやがった…】

【防御技が使えるなんて…】

「くそっ…！　しかも防御技が硬い…」

【まさか…、滅罪レベル三倍の？原罪の矢？を防ぐとは…なんて奴だ…？レベル0？…】

「今度はこちらからいきますよ。」

そう言うത്？レベル0？は？断罪者？の後ろに回り込み、パンチを繰り出す。　？断罪者？は吹き飛ばされる。

ドガアアアアン！！！！

【ぐはぁ…！？　ぐ…　ぁ…】

【？断罪者？！！？】

「次はお前です。」

【しまっ…！！ 【？八花閃光・波？！！】 なっ！？ ？六幻？！
？】

八花閃光・波：八花閃光を波の様にして放つ遠距離技。 使い方次第では強力な？盾？にもなる。 アレンと？六幻？が使う技の中では中級クラス。

「邪魔ですよ。」

しかし、？レベル0？は？六幻？の？八花閃光・波？を片手で弾き、
？六幻？を吹き飛ばす。

【ぐあああああ！！！！】

ドガアアアアン！！！！

【？六幻？！！？ くっ… 基本値が違いすぎる…】

【乗れ！！ 小僧！！】

【？天針？！！？ すみません！！】

【？判？劫火灰燼 『火判』！！】

「新手か」

？レベル0？は？鉄槌？の『火判』に向けて砲撃を放つ。 砲撃は『火判』を簡単に撃ち破り、？鉄槌？を飲み込む。

【【？鉄槌？！！？】】

【うわああああ！！？】

しかし

「？千爪刃・燕？！！」

千爪刃・燕：千爪刃の斬撃を飛ばして攻撃する。 攻守両用の技。
技の元はリボーンの本山武の？時雨蒼燕流？特式十二の型 右太刀『斬雨』を参考にしています。（一応）

「へえ… よく受け止めたね。」

「大丈夫か！？ ？鉄槌？！！」

【うう…】

「気絶しているだけか…？レベル0?!?!」

「ふふふ…続きを始めましょう。」

「いくぜ!!」

また俺達はぶつかり合う。

ドガアアアアン!!!

【？天針?!?! いきますよ!! アレンの援護に!!】

【了解した。いくぞ!! 小僧!!】

「邪魔ですよ。」

【【な!?!】】

「はっ!!」

？レベル0？は？白い道化？と？天針？を吹き飛ばす。

ドガアアアアン!!!

「？？白い道化?!?!？ ？天針?!?!？ くそっ…!!」

「余所見は… 禁物ですよ!!」

「ぐああああ!!?」

アレンは地面に叩きつけられる。

ドガアアアアン!!!

「う…あ…（しまった…頭を打った…世界が…揺れる…）」

「大丈夫ですかあ？ ふふふ…」

「くっ…（身体が…もう…ボロボロだ…）？ 白い道化？…？ 道化ノ帯？…」

僕は動かせない自分の身体を？ 道化ノ帯？ で無理に動かす。

「あはは、あれえ？ まだ動けたの？ じゃあ…もっともっと、

『アレン・ウォーカー』」

「（【六幻】が解けた…『奥の手』を使う訳にはいかない…） 臨界点突破？ 白い道化？…？ 道化ノ剣？!!!」

道化ノ剣「クラウン・ブレイド」：退魔ノ剣の強化版。修行により身につけた技。魔を退ける退魔ノ剣と違って？ 破壊？ に特化し

ている。 またの名を？破壊ノ剣^{こる}？。 斬撃を波動として放つ事ができる。 波動は連続で五回。 溜めると威力と速度、破壊力が増す。 アレンが使える技の中では最強クラス。 形状は退魔ノ剣と同じだが、色が退魔ノ剣とは反対になっている。

「いくぞ！！ ?レベル0?!!」

「楽しませてくださいね。 『アレン・ウォーカー』」

ドガアアアアン!!!!

「はあああ!!!!」

「!!?」

「喰らえ!!! ?レベル0?!! ?道化ノ斬撃?!!」

道化ノ斬撃「クラウン・スラッシュ」：道化ノ剣、退魔ノ剣、爪の状態で見える。 斬撃を飛ばして攻撃する。 斬撃は溜める事によって威力と速度、破壊力が上がり、斬撃の数も増える。 溜めなしで十、溜めありで五十になる。 斬撃は、アレン（使用者）の意思で自在に操る事ができる。 アレンが使える技の中では最強クラス。

ドシュッ!!

「（斬撃？）効きませんよ？　？咆哮の壁？！！」

？レベル0？は？咆哮の壁？を使う。

ギギギギギギギイイイイ！！

しかし――

ズバン！！

「！！？」

？レベル0？の？咆哮の壁？はあっさりと切り刻まれる。

「（今だ！！　この際仕方がない！！）？道化ノ演劇？！！」

道化ノ演劇「クラウン・サーカス」：現在のアレン最強の技。発動するとアレンは身体に白いオーラを見に纏っている。オーラのせいなのかはわからないが、この姿になるとアレンの姿が薄くなる。しかも薄くなっているこの状態は相手の攻撃をすり抜ける。さらにこの状態は技の威力が上がる。？十字架ノ墓？で？レベル0？にダメージを与えられるほど。動きまで速くなり、必ず残像が出来るほど。動きは？レベル0？でも見失うほど。すり抜けるのは攻撃だけでは無く、壁などもすり抜けられる。すり抜けられ

るのに防御最強。理由は？道化ノ帯？等を使用する場合に半実体化するためである。常に？白い道化？の仮面を被っている。

「いきますよ。？レベル0？。？十字架ノ墓？」

「今さら？十字架ノ墓？なんて効くわけ無いでしょう。」

「どうかな？」

ニヤリ…と、アレンは不敵に笑う。？レベル0？は何かあると思
い？十字架ノ墓？を避ける。

すると――

――カッ――

地面が光に包まれて、消滅する。

「何!!!??」

「だから… 言ったでしょう？ 『わからない』ってね。」

「くそっ… ？振動破?!!!」

「？十字架ノ爪？」

？レベル0？の？振動破？を？十字架ノ爪？で防ぐ。

「そんな…！？　？振動破？が防がれた…！？」

「さあ…　終わりにしましょう…！」

また僕はぶつかり合う。

バキイイイン…！！

火花が散る。

「？八花閃光・波？」

「？真振動破？…！」

ドガアアアアン…！！

爆発が起こる。

「何故だ！？　何故私が^{なぜ}圧^おされている！？　私は？レベル0？…！
『アクマ』最強形態…！」

「？道化ノ斬撃？」

？レベル0？に向かって五十の斬撃が放たれる。

「うわああああ！！？」

霧が晴れるとそこには左半分が無くなった？レベル0？がいた。

「そろそろ終わりにしましょう。　？終焉ノ十字架？」

終焉ノ十字架「デスクロス」：破滅ノ十字架の強化版。　主に近距離攻撃に使用するが、遠距離、中距離攻撃にも使用する。　道化ノ演劇以外の状態でも使用可能だが、道化ノ演劇以外で使うと身体が壊れる。　巨大な？斬撃？で斬り刻む。　アレンの技の中では道化ノ演劇に続く最強技である。　連続使用可能だが、デメリットとして一週間まったく動けなくなる。　通常は一回使用だが、連続だと五十出せる。　？爪^{エッジ}？を使うと軽く五十を越えてしまう。

「あ…ああ…うわああああ！！？」

ドガアアアアン！！！！

「左目発動。　『アクマ』感知起動。」

左眼：希少技能^{レアスキル}。　『アクマ』と『人』を区別できる眼。　幻覚魔

法も見分けられる。

《『アクマ』感知起動…『アクマ』反応…消失を確認。》

「了解。速く…戻らないと…シグナム達が…いけない…速く…シグナム達の元に…？道化ノ剣？…？ソードスライダー？」

ソードスライダー：シャイニングフォース・クロス・レイドに出てくる両手剣の技。剣の上に乗って高速で移動する。攻撃と移動に使える。

僕はソードスライダーを使って一気にシグナム達の元に向かう。

「シグナム…ヴィータ…シャマル…ザフィーラ…はやて…待っててください…今…いきます…」

僕はシグナム達の元に向かう。

十二話

十二話

「!? アレは…スターライトブレイカー!? 広域空間型のスターライトブレイカーなのか？」

スターライトブレイカーは、五人の少女に向かって放たれていた。

「……………! マズイ…!! アレは…高町なのは!? それにあの四人は…(なのはの親友ですかね?) 助けないと…? 道化ノ剣?! ソードスライダーの速度をあげますよ!!」

道化ノ剣は速度をさらにあげる。

因みに？道化ノ演劇？は解いていません。

「（間に合え…！！）」

僕はそう思いながら急いでいた。

「嘘！？ スターライトブレイカー！？」

「あの子…広域空間型？」

「フェイト。 プロテクション貼ろう。 このままだとマジで落とされる。」

「アリサちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん。 プロテクション貼ろうよ。」

「今はすずかちゃんとアリシアちゃんの意見に賛成！！」

そんなことをやっていたらスターライトブレイカーが目の前に迫っ

ていた。

『プロテクション!!』

私達はプロテクションを貼ります。

すると空から白い光（閃光）が私達の前に降り立ちます。

「はあああ!! ? 十字架ノ爪?!!!」

五つの十字架が私達をスターライトブレイカーから守ってくれました。

聞いたことのある声と共に。

「大丈夫ですか? 高町なのは。 また会いましたね。」

その声の主はアレン君でした。

「大丈夫ですか？ 高町なのは。 また会いましたね。」

「もしかして… アレン君？」

「はい。 そうですよ。」

しかし――

チャキ…

なのは以外の四人は囲む様にして、僕に『デバイス』を向ける。

「……………」

「動かないでください。」

「大丈夫！？ なのは！！」

「貴方の名前を教えてください。」

「貴方は…この間の？ 白い人？ ですよね？」

「皆待つてよ！！ アレン君は悪い人じゃないよ！？」

『え？』

なのはの言葉にアリシア、アリサ、すずか、フェイトと呼ばれていた少女達は驚いていた。

「……………すみません。水を指すようで悪いのですが…『アレ』をどうかしなくて良いのですか？」

『あ…』

「……………」

どうやら全員、今何をするべきなのかを僕の介入によってすっかり忘れていた見たいです。

「……………なるほど。大体わかりました。あの『闇の書の主』…すなわち、はやてを止めれば良いんですね？」

「はい。そうです。」

「うん。」

「？道化ノ剣？…！いきますよ。」

僕は『闇の書』…はやてを止めるべく、空に飛ぶ。

「はやて!! 止まってください!!」

「お前は…ウォーカーか？ 私はお前を傷つけたくはない。」

「傷つけないのだったら…止まってください!! はやて!!」

「もう無駄だ…時期に私は意識を失いこの世界を破壊するだろう。」

「無駄なんかじゃない!! はやて!! 君自身で止められないのなら…僕が止めてやる!! だから…もう…こんな事はやめろ!! はやて!!」

「……もう…止められないんだ…」

「……! 構えろ。 はやて。」

「ウォーカー…?」

「いいから構えろ!! 戦って…目を覚まさせてやる!!」

「ウォーカー…」

「？道化ノ斬撃？！！」

「つつ…！！　？パンツァーシルト（盾）？！！」

僕は？道化ノ斬撃？を放つ。　はやては？パンツァーシルト？を形成して、？道化ノ斬撃？を防ぐ。

「流石ですね。　（まさか…　？道化ノ演劇？を使ってるのに防がれるだなんて…）　？十字架ノ爪？」

「デアボリック・エミッション、闇に、染まれ」

？十字架ノ爪？はデアボリック・エミッションによって相殺される。

「はあああ！！」

「吸収」

「しまっ…！！？」

僕ははやてに（？）『吸収』されてしまう。

「お前も…私の中で…永久に…眠れ。」

「意識が…」

僕の意識は闇に落ちた。

「そんな！？ アレン君が…」

「吸収された…！？」

「あれだけ強かったアレンが…あんなにあっさりと…！？」

「大丈夫かしら…アレン…」

「アレン君を信じようよ…」

『うん…』

皆アレン君を信じています。

無事に帰ってきて… アレン君…

「……………ううん…此处こゝは…？」

僕は周りを見渡す。

此处は…はやての家？ さっきまで僕は戦闘をしていて、はやての『吸収』を喰らって…それから…わからない…

そんなことを考えていると部屋に誰かが入ってきた。

ガチャ…

「失礼…アレン！ 起きたんだね？」

僕は入ってきた人物に驚いた。

「マナ…？」

「おはよう！ アレン。起きたんだね。あれ？ どうしたの？
信じられないものを見るような眼で人を見て。」

「マ…マナ…？ ど……どうして…」

「…？？？ どうしたんだい？ アレン。あ、もしかして頭が混乱
してたりするのかな？」

いきなり考えてる事を当てられた。
そんなに分かりやすい顔してましたかね？

「あ…いえ…なんでもない…です…」

「それじゃいきましようよ。 アレン。 はやて達が待っています
よ。」

「はやて達が？」

僕はその瞬間に分かった。

これは――

「ああ… 夢なんだな…」と。

――

十三話

十三話

僕は色々な事をして今はマナと二人きりで話し合っています。

「楽しかったね。 アレン。」

「ええ。 そう…ですね…」

「??? どうしたんだい? アレン?」

「マナ…」

「???」

「これは…『夢』なんですよね?」

「……………うん。 そうだよ。 ……………でも…アレン。 ずっと…此^こ処^こにいてもいいんじゃないかな？ 此処なら…誰も…死なずにすむんだよ…？」

「それでも…僕には…待っていてくれる人がいるから…？ 大切な人？ が…？ 守るべきもの？ があるから…だから…僕はいくよ。 マナ…ううん…父さん。 良い夢を見せてくれて…ありがとう。」

「……………そうか…ならアレン『腕輪』を。」

僕はマナに『腕輪』を見せる。

すると――

キイイイイイン！！！！

『腕輪』は鋭い輝きを放つ。

「これは…！？」

「アレンの？ 新しい力？ だよ。 この？ 力？ で…？ 守るべきもの？ を守っておいで。 アレン。」

「マナ…、……………はい！！！」

「…？ 立ち止まるな？」

「……………？歩き続ける？でしょ？ 父さん。」

「……………いつてらっしゃい。 アレン。」

「……………いつてきます。 父さん。」

僕は立ち上がり？白い道化？を展開する。

「この？夢？を撃ち破りますよ！！ ？白い道化？！！」

【ええ。 いきますよ！！ アレン！！】

「はい！！」

「【？道化ノ斬撃？！！】」

バリイイイイイン！！

僕達は？道化ノ斬撃？を使って？空間？を撃ち破る。

その先に広がっていたのは真っ暗な『空間』だった。

「あれ？ なんでアレン君が居るんや？」

「ウォーカー！？ あの？夢？からどうやって脱出したのですか！？」

「え…？」

僕はそこにいた人物に驚いた。

そこにいたのは紛れもなく僕の親友、八神はやてと僕がさっきまで戦っていた女性が今僕の目の前にいるからです。

「『祝福の風』… リインフォース？」

「そうや。 な？ リインフォース。」

「はい。 主はやて。」

後から出しますがリインフォース？が通称リインですが、リインフォース？が出るまでリインフォース？がリインです。

「リイン。 此処から出ないことには何も出来ないのでは？」

「せやから、今この『空間』から出るから、アレン君は私に掴まっ
ていてな？」

「わかりました。」

しかし――

ドン――！

「え？」

僕は突然誰かに押されて『闇の書の闇』の中に取り残されてしまっ
た。

十四話 闇の中の自分。 『光（己）と影（己）』の戦い。

十四話 闇の中の自分。 『光（己）と影（己）』の戦い。

闇の中に取り残されてしまった僕は？影？と名乗る僕と瓜二つの少女と戦闘をしていた。

「うおおお！！」

「……………」

バキィィィン！！

「ぐっ…？十字架ノ爪？！！」

「？十字架ノ爪？」

ドガアアアアン！！

「くっ…？影？！！ 貴方の目的はなんですか！？ 教えてください！！
？判？ 劫火灰燼『火判』！！」

「……………教えることは…出来ない。 ……………教えてほしかったら…
私を倒しなさい。？判？ 劫火灰燼『火判』」

ドガアアアアン！！

「くっ…（使う技・攻撃は全て同じ…どんな技を使っても全て同じ
技でかえされる…これじゃ…何時^{いつ}までたつても…彼女…？影？を倒
せない…！） ？八花閃光・波？…！！」

「……………八花閃光・波？（まだ… マナさんからもらった？力？を
理解していないのか。 ……………アレ^ン…速く…速く新しい？力？を
使いこなしてください。）」

ドガアアアアン！！

キイイイイイン！！

「「！」「」

アレンの『腕輪』がまた光輝く。

さっきよりも強く鋭くそれでいて？優しい？輝きを放っていた。

アレン「『腕輪』が…」

さらに輝きが強さを増す。

「（上手くいけばこのまま『武装錬金』が使える。でも…失敗したら…食われる。） マナさんから受け取った新しい？力？を使つて。アレン。」

「！？ マナから受け取った新しい？力？…！？」

『腕輪』が…暖かい…まるで…呼応しているみたいだ。

これが…新しい？力？…なのか…？

「……………突撃銃の『武装錬金』サンライトハート！！」
ランス

僕は？新しい力？『武装錬金』を発動する。

「突撃槍！！？ うっ！？ 重い…！！」

突撃槍はかなりの重さがあった。

「……………突撃槍…サンライトハートか。……………アレン。」

「…？」

「合格です。 貴方についていきましょう。」

「！？」

「貴方についていくと言っているのです。 あ、それと私の名前は？影？では無く？アレス？ですから以後お気を付けて。」

「えっと…？ 契約？」

「？ 契約？」

僕達は『お互いの魔力（僕は純白、アレスは漆黒）』を交える。

これで？ 契約？ 終了です。

「さてと！ …？ 契約？ も済ませた事だし、此処から出よう。 アレ

ン。」

「あの… 貴女は本当にアレスですか？　なんかさっきまでの暗い感じは一体何処にいったんですか？」

「あたりまえです。アレは全部『演技』ですよ。貴方が『武装錬金』を使える様になるまでをアレでみるのが私の役目だったからです。まあ、そんなことはさて置き… アレン！ 『ユニゾン』して此処から出ますよ！！」

「『ユニゾン』！？」

「私の本職は『ユニゾンデバイス』ですよ？」

「じ…じゃあ…」

「それじゃいきますよ。」

一瞬の沈黙――

そして――

「『ユニゾン・イン』！！」

僕達の身体が光に包まれる。

133

十五話

十五話

「…………アレス。 なんですか？ この姿は？」

「…………わかりませんよ。 はっきり言って私は『ユニゾン』をした経験自体が無くてですね…まさか…背中に大きな純白の翼と大きな漆黒の翼を一枚ずつ展開しているだなんて…」

「…………本気で何も知らないんですね。」

「…………すみません…」

「…………仕方がないですね…アレス。 どうやって脱出するんですか？」

「……………」

「アレス？」

「…………アレン…あそこに…『大きな球体』が見えますか？」

『大きな球体』？

そんな物… あった！

「アレス！ あの少し『大きな球体』ですよ？」

「アレン…アレがどんどんこっちに近づいてきているって…わかってますか？」

「そういえば…少しずつ近づいてきている様な…アレス。 アレは？」

「…………アレが…闇の書の？コア？です。」

「？コア？！？」

そんなことを話していると闇の書の？コア？が僕達に急接近してきた。 それと同時に僕達の身体が『光の球体^{たま}』になって闇の書の？コア？に吸収されてしまう。

「うわああああ！！？」

「しまっ…きゃあああああ!!?」

僕達の意識は闇に落ちた。

――

二つの光が?コア?から出てくる。

ぽっっ
…

シューーー…

「……………」

「……………」

二人は意識が無いのか全然動かない。

しばらくして――

「……………うつ…はっ!? アレン!! 大丈夫ですか!? アレン!!
アレン!?!」

「……………アレス…? アレス!?! あれ? どうして…僕達は確か
闇の書の? コア? に飲まれたのでは…? どうして無事なんだ?」

グレートアックス
「大戦斧の『武装錬金』 フェイタルアトラクション!! アレン!
! 『武装錬金』を!! 一気に撃ち破って此処から脱出します!
!」

「あれ? 『ユニゾン』は?」

「仕方がないので『ユニゾン』はこの空間から出てからです。」

「了解!! 突撃銃の『武装錬金』 サンライトハート!!」
ランス

僕達は『武装錬金』を発動する。

「フェイタルアトラクション!!」

「サンライトクラッシュャー!!」

武器の輝きが一層強さを増す。

「うおおお!! ぶち抜け——!!」

僕達は光を見た。

十六話 最後の戦い。(前書き)

今回でA・S終わりの予定です。

上手く出来たかわかりませんが間違い等があったら教えてください。

十六話 最後の戦い。

十六話 最後の戦い。

「？彼？がいないのは正直痛いが今は僕達で出来ることをやろう。
今現在、案は二つ有る。一つは強力な氷結魔法で氷付けにする
か。もう一つは軌道上に待機しているアルカンシエルを発射する
か。守護騎士達の意見も聞きたい。」

「はい。えつと多分、一つ目は難しいと思います。主のいない防
衛プログラムは魔力の塊見たいな物ですから…」

「アルカンシエルも絶対駄目！！ あんなの使ったらはやての家が
無くなっちゃうよ！！」

ヴィータが手を×にして意見を言う。

「アルカンシェルって…？」

「半径10メートルを消滅させながら進む魔道砲…って言うたらかる？」

ユーノはなのはに説明をする。 ↑ かなり分かりやすく。

「ダメダメダメー！！！」

「絶対駄目だよ！！ クロノ！！！」

「なのはとフェイトの言う通りだよ！！！」

なのは、フェイト、アリシアはクロノに問い詰める。

「僕だって出来ればあんな物使いたくないさ。 守護騎士達は他に無いかな？」

「すまない…我々は今まで暴走に立ち会った事自体が無いのだ。悪いが…役に立てそうには無い。」

「そうか…」

そんな時――

ピシッ…

突然何もない空間に亀裂が入る。

『!?!?』

バリイイイイン!!!

「ぶはあ!! やつと出れたあ!!」

聞こえたのは『彼』の声だった。

「ぶはあ!! やつと出れたあ!!」

「ご苦労様です。 フェイタルアトラクション。 『武装解除』」

アレスが持っていたフェイタルアトラクションを『腕輪』に戻す。

「サンライトハート。ありがとうございました。『武装解除』」

僕も持っていたサンライトハートを『腕輪』に戻す。

「あの…もしかして…アレン君ですか？」

聞いた事のある声がした。

もしかして…

「もしかして… なのはですか？」

「やっぱり！！ アレン君だ！！」

「君がアレン・ウォーカーか。」

「…………… 貴方は？」

「すまない。 僕の名前はクロノ・ハラオウンだ。 クロノでいい。」

「わかりました。 クロノ。 じゃあ僕の名前もアレンでいいです。」

「そうか。いきなりですまないが手伝ってくれないか？ アレを… 防衛プログラムを倒さなければならぬんだ。」

「なるほど… わかりました。手伝いましょう。案は何があるんですか？ クロノ。」

「今現在出ている案は、強力な氷結魔法で氷付けにするか、アルカシエルで吹き飛ばすか。このどちらかなんだけど…」

「もしくは君のその不思議な？力？を使って倒すか…この三つだ。」

「じゃあ…僕とアレスで防衛プログラムを倒します。皆さんは、援護をしてください。」

「ならば我々は防衛プログラムのバリアの破壊を任せよう。」

「しっかり合わせろよ。高町なのは。」

「ヴィータちゃんもねー!」

「まずはヴィータ!」

「『鉄槌の騎士』ヴィータと『鉄の伯爵』グラーファイゼン!」

《ギガントフォルム》

アイゼンのカートリッジをロードして、ギガントフォルムにする。

「轟天爆碎……!! ギガントシュラーク……!」

ギガントフォルムのアイゼンを一気に振り下ろす。

防衛プログラムのバリアを簡単に破壊する。

「なのは……!」

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン。 行きます!」

《ロードカートリッジ》

なのは「エクセリオン……バスター……!」

なのはの放ったエクセリオンバスターは二枚目のバリアを破壊する。

「シグナム!! (何か…、おかしい…)」

「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン。刃と連結刃に続くもう一つの姿」

《ボーゲンフォルム》

カートリッジをロードしたレヴァンティンのその姿はまさに『』。

シグナムは弦を引きながら構える。

「翔けよ、隼!!」

《シュツルムファルケン》

シグナムが矢を放つと防衛プログラムの三枚目のバリアにあたって爆発を起こす。

「(あっさりすぎる…!) フェイト!!」

「フェイト・テストロッサとバルディッシュ・アサルト行きます!!」

《ロードカートリッジ》

バルディツシュのカートリッジをロードする。

「撃ち抜け、雷神」

《ジェットザンバー》

フェイトがジェットザンバーで切り裂く。

四枚目のバリアを破る。

「（何故？ 何故反撃をしないんだ？） はやて！！」

「彼方より来たれ、やどりぎの杖。 銀月の槍となるて、撃ち抜け！ 石化の槍、ミストルティン！」

はやてはミストルティンを放つ。

防衛プログラムのバリアにあたったミストルティンは五枚目… 最後のバリアを貫き、なおかつ防衛プログラム本体を石化させる。

しかし、直ぐに再生してしまう。

アレン「（まさか…）『エクソシスト救済者』アレン・ウォーカー。 行きます。

グレートアックス
『大戦斧』の武装錬金、フェイタルアトラクション!!」

僕はフェイタルアトラクションを持ちながら防衛プログラムに接近する。

すると――

くぱあ…

防衛プログラムの巨大な口が開く。

アレン「やっぱり…『アクマ』か!! しかも^{暴走巨竜}レベル4か…」

防衛プログラムをよく見るとまさに巨大な竜である。

アレン「フェイタルアトラクション!!」

「ギャオオオオ!!」

「紫電…一閃!!」

「守護の拳!!」

「シュワルベフリーゲン!!」

「!?!?」

シグナムの紫電一閃、ザファイラの守護の拳、ヴィータのシュワルベフリーゲンがレベル4にあたる。

「グオオオオオ！！？」

ドガアアアアン！！！！

「……………全然効いてないね。 私達の攻撃以外。」

「そうですね。 フェイタルアトラクション『武装解除』。 突撃^{ラン}の『武装錬金』 サンライトハート改！！」

^{メタルジャケット}
「防護服の『武装錬金』 シルバースキン！！」

僕はサンライトハート改を、アレスはシルバースキンを発動する。

「アレス…シルバースキン…？裏返し（リバーズ）？アレ（レベル4）に効きますかね？」

「大丈夫だと思います。」

「（了解。）シグナム！！ ザファイラ！！ ヴィータ！！ 援護…頼みます！！」

「」「」おっ！」「」

僕はレベル4に向かって行く。

「グオオオオオ！！」

暴走した竜型の『アクマ』レベル4の口から放たれたのは砲撃だった。

「飛竜…一閃！！」

ズガガガガガ…

ドガアアアアン！！！！

相殺して爆発が起きる。

「ギガントシュラーク!!!」

ガキイイイイン…

「な…!!?」

あたしは驚いた。

レベル4がギガントシュラークを片手で受け止めていたからだ。

「ギヤオオオオオ!!!」

さっきよりもデカイ砲撃!!

ヤベえ!!

「「ヴィータ!!!」」

シグナムとザフィーラが気づいたみたいだけど、もう走っても間に合わない!!

そんな時だった。

「？道化ノ演劇？、？十字架ノ爪？」

アレンがレベル4の砲撃を十字架の閃光で破壊してくれた。

「大丈夫ですか！？ ヴィータ！！」

「「ヴィータ！！ 大丈夫か！？」」

「あ…ああ…大丈夫…」

「！！ 来ましたよ！！」

「「「！！！！」」」

アレンの言葉にあたし達はそれぞれの武器を構える。

「紫電…一閃！！」

「守護の拳！！」

「シュワルベフリーゲン！！」

「？道化ノ帯？」

ドガアアアアン！！！！

シユルルルル…

あたし達の技があたった後、アレンの拘束技？道化ノ帯？がレベル4を拘束した。

ビシッ！！

「（よし。）アレス！！ 準備OKです！！」

「はい！！ ^{ダブル}W『武装錬金』 ^{アナザータイプ}シルバースキンA・T？ ^{リバース}裏返し？！！」

「！！？」

レベル4の身体にシルバースキンアナザータイプが絡み付く。

「ウォーカー！！ あの服はなんだ？」

「無敵の防御力を誇る服…シルバースキン。（ギリギリか…）」

「敵の防御を無敵にしてどうするのだ！！」

「大丈夫ですよ。 通常のシルバースキンは外部からの攻撃を全て

シャツアウトする無敵の防護服メタルジャケットですが、裏返しにすれば外部への攻撃を全てシャツアウトする無敵の拘束服ストレイトジャケットへとその特性をも裏返します。　なのは！！　フェイト！！　はやて！！　頼みます！！」

「『はい！！』」

三人は返事をして、それぞれの準備をする。

「全力全開！！　スターライト…」

「雷光一閃！！　プラズマザンバー…」

「響け、終焉の笛！！　ラグナロク…」

そして――

放たれる。

「『ブレイカーッ！！』」

放たれた砲撃はレベル4にあたる。

レベル4は半分身体が消滅している状態であった。

「アレス!!」

「はい!! 『ユニゾン・イン』!!」

僕達は最初に『闇の書の闇』の中での『ユニゾン』の姿になった。

因みに？道化ノ演劇？は解いていません。

「？道化ノ演劇？解除。　？終焉ノ十字架？!!」

僕は？道化ノ演劇？を解除して？終焉ノ十字架？を放つ。

因みに使っているのは？爪？です。

【《アレン!!？　貴方は死ぬ気ですか!!？　ただでさえ？道化ノ演劇？以外の状態で？終焉ノ十字架？なんて使ったら貴方の身体が壊れますよ!!？》】

「はあああ!!!!」

斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!
斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!　斬!!

アレン「最後だ!!　欠片を残さず消えろ!!　？終焉ノ破壊者？

「！！！！」

終焉ノ破壊者「デスブレイカー」：道化ノ剣、退魔ノ剣、爪、道化ノ演劇の状態で使える技。アレン、？白い道化？が使う唯一の収束砲。道化ノ演劇以外でも使えるが道化ノ演劇以外で使うとまず確実に身体が壊れる。？終焉ノ十字架？に続く最強技である。

ドガアアアアン！！！！

レベル4は完全に消滅した。

「左眼。」

《『アクマ』探知…完了。『アクマ』レベル4、消滅を確認。》

アレン「ご苦労…様…です…」

そして僕は落ちていった。意識と共に。

一話 最初の別れ。 始まり。

一話 最初の別れ。 始まり。

あれから二年が経ちました。

リインフォースは僕の『ユニゾンデバイス』になっていて、はやてには新しい融合騎『リインフォース？』がいます。

そのため、リインフォースは今『アイン』と名前を変えています。

今日は雪ですか… ブルブル… 寒い…

「ハックション！！ ブルブル…」

「大丈夫か？ ウォーカ！。 風邪でもひいたか？」

「アインの言う通りですよ？ アレン。ただでさえ、まだ二年前の？^{デメリット}後遺症？が残ってるんですからね？」

「大丈夫ですよ。アイン。アレス。そろそろ合流ポイントのハズなんですけど…」

遠目に見ると少女が一人、こっちに手を振っている。

なのはですね。

どうやら近くにヴィータもいるみたいです。

アレン「いってみましょう。」

アイン、アレス「はい。」

僕達はなのは達の元に向かう。

「おーい！！ なのは！！ ヴィータ！！」

「やっぱりアレン君達だ！！ おーい！！」

「おーい！！ アレン！！ アイン！！ アレス！！」

なのは達と合流する。

「しかし…寒いですね…」

「相変わらず寒いのは苦手なのか。アレンは。」

「我が主は相変わらず寒いのが苦手なんですよ。」

僕の『腕輪』… ラキが喋る。

「ちよっ！？ ラキ！？ 恥ずかしいからそれは言わないで——
——」

僕は否定する。

するとなのは達に笑われてしまう。

しかし僕はそこで見た。

なのはに近づく『透明な刃』を。

危ない！！

でもなのは達はまだ気づいていない！！

アレン「なのは！！ 危ない！！」

なのは「えっ…?」

ドンッ…

ブシュッ!!

なのはの目の前を血濺きが降りかかる。

「がっ…はぁ…」

なのは達は見た。

なんと、アレンの胸が『アンノウン未確認物体』の鎌の様な刃に串刺しにされていたのだ。

「ブラッディダガー!!」

「シュワルベフリーゲン!!」

怒りを露にしたアインのブラッディダガーとヴィータのシュワルベフリーゲンが『アンノウン未確認物体』を撃破する。

「アレン！！ アレン！！ 誰か！！ 速く医療班を呼んでください！！ アレン！！ アレン！！」

「……………（意識が…深く…堕ちていく…）」

そして――

僕の意識は深く闇に堕ちていった。

――

「シャル… 嘘やよね…？」

「嘘じゃないわ… アインとアレスちゃんもよく聞いてね… アレン君は最悪の場合… 二度と目覚めないかもしれないの。」

「嘘… アレン…」

「ウォーカー… なんとかならんのか！！ シャマル！！ どうにか… どうにかウォーカーを目覚めさせる方法はないのか！！？」

「頭を冷やせ!!」

「ぐはっ… ガクッ…」

シグナムはアインにボディーパーを放ちアインを気絶させる。

アインを椅子に寝かせる。

ピッ… ピッ…

「アレン…」

「ウォーカー…」

「……………まったく…主には呆れてしまいます。まさか…自分を仮死状態にするだなんて…」

「「!!!?!」」

「……もう深夜ですので……そろそろ『起きたら』どうですか？
主。」

「……ばらさないでくださいよ。　　ヲキ。」

「「……？」」

「フフツ……いいじゃありませんか。　　主。」

「よくありませんよ。　　ヲキ。　　お陰で逃げる羽目はめになってしまっ
たじゃないですか。」

「いいじゃありませんか。　　元々そういう作戦だったんですから。」

そついう話し合いをして僕は病室から脱け出した。

「……《シグナム》……貴女に言いたいことがあります。　　外に来て

ください。》
「

「！！？ 《ウォーカー！！？ …………… わかった。 私一人で行く。
》
「

「 《では…外にて待っていますよ。》
「

— 外 —

「ウォーカー！！ 言われた通り、一人で来たぞ。」

私はウォーカーを呼ぶ。

「よく来てくれましたね。 シグナム。」

ウォーカーの声と共にウォーカーが岩の後ろから現れる。

因みにウォーカーの服は病人がよく着ている服だ。 ↑ っいさつき
まで病室で寝たきりだったから。

何故かウォーカーの身体が私より少し高い位の身長になっていた。

「話とは何だ？　ウォーカー」

「実は………それから………八年後に会いましょう。」

「八年後だと！？　ウォーカー！！　それにさっきの事……」

「全部本気ですよ。　さっき言った事も八年後会いましょうっていう話しも全て……ね。」

「ならばウォーカー………これが………私からの返事だ。」

そして僕達はお互いの近づき……

短い口づけを交わした。

「さようなら。　シグナム」

そして僕はシグナムから離れる。

「ああ……八年後に……また会おう。　ウォーカー。」

「約束ですよ。」

「ああ…約束だ。」

そして僕達は約束を交わした。

「さようなら…ウォーカー…」

何時^{いつ}しか私はウォーカーが消えた場所を見つめながら涙を流していた。

一話 最初の別れ。 始まり。(後書き)

よかったら感想ください。

二話

二話

あれからもう四年が経つ。

今は火事と『アクマ』レベル1、レベル2、レベル3に巻き込まれたとある『建物』の内部にいる。

ガララッ…

「うわわっ！！ 瓦礫が危ないよ！！」

「アレス。 貴女はシルバースキンを着ているから大丈夫でしょうが！！」

「そうだけど…一応、振動や衝撃は防げないから痛いんだよ」

「かなり建物自体が脆くなっていますね。速くしないと…？左眼？！…サーチー！」

《サーチ開始。…………この付近に一般人を一名確認。付近にはレベル1が八十体ほどいる様子。》

「了解。アイン、アレス！！いきますよ。（間に合え…！）」

「はい。（うん…！）」

そうして僕達は一般人の元に急いだ。

「ひっ…（誰か…助けて…）」

私は目の前の異形に目がいってしまい、後ろから倒れてきた『石像』に気づくことができなかった。

少女「誰か!!」

私は誰もいない事がわかっていたのに関わらず、『誰か!!』と、叫んでしまった。

そんな時だった。

「はあああ!! ? 六幻?!?! ? 一刀爆砕?!?!」

一人の男の人が私に迫っていた『石像』を切り裂いてくれました。

「大丈夫かい? キミ…名前は?」

私は名前を聞かれただけなのに『ビクッ』と、身体を震わせてしまった。

「えっと…スバルです。 スバル・ナカジマ」

「そっか。 スバルか。 じゃあ、僕の名前を覚えておきましょう。 僕の名前はアレン。 アレン・ウォーカーです。 しっかり掴まっ
ていてくださいね。 スバル。 でないと振り落とされてしま
いますからね?」

「は…はいつ…！」

私はアレンさんの背中に振り落とされないようにしっかりとしがみつきました。

僕はスバルを連れてレベル1（約八十体）と戦っていた。

「《？白い道化？。　しっかりとスバルを押さえていてくださいね。《
「」

【わかっていますよ。　僕を一体誰の『イノセンス』だと？】

「ふふっ…　《任せましたよ。《（本当に頼りになる…）　イノ
センス発動。　？六幻？！！　？一刀斬？！！」

一刀斬：ただ横になぎ払う様にして横一線に斬撃を飛ばすだけの技。

レベル3までなら簡単に切り刻める。 技の威力は最弱クラス。

？一刀斬？の斬撃はレベル1を五体飲み込んだ。

すると他のレベル1（十体程）が僕に向かって来る。

「アイン！！」

「はい。 闇に、沈め。 ブラッディダガー！！」

僕に近づいたレベル1はアインのブラッディダガーによって破壊される。

「アレス！！ 一カ所にコイツらを集めて！！」

「了解です！！ ？水の鞭？！！」

水の鞭：身体の一部（主に腕）を水に変化させて相手を拘束する。

基本的に攻撃力はない。 最弱クラス。

アレスは左腕で残っていたレベル1を全て捕まえてひとまとまりにする。

「アレン！！」

「？十字架ノ墓？！！」

ズバン！！

集めたレベル1を全て？十字架ノ墓？で切り裂いた。

アレン「もう大丈夫ですね。　？クリスタルゲージ・ライフエナジ
ー？」

クリスタルゲージ・ライフエナジー：通常のクリスタルゲージと形
は同じだがこれはクリスタルゲージの内部にいる者を回復すること
ができる。　アレンが使えるミッドチルダ式魔法。　反対に内部に
いる者にダメージを与える？クリスタルゲージ・ライフダメージ？
が在る。

僕はスバルの周りにクリスタルゲージ・ライフエナジーを貼る。

「あの…　アレンさん。　これは？」

「クリスタルゲージ・ライフエナジーっていう僕の魔法でね。　こ
の中にいれば怪我とかも回復するから、そろそろ此処に人が来るだ
ろうからその人が来るまで此処から出ちゃ駄目だよ？」

「はい。」

僕は次の場所に向かった。

「うう…スバル…何処…？」

私は妹を、スバルを探していました。

でも…

ミシミシ…

バキッ！！

「えっ…？」

私は最初、何が起きたか全然わかりませんでした。

けど後から理解しました。

私のいた階段が『バキッ!!』と、音をたてて崩れ落ちていたからです。

「だ… 誰か!!」

私は叫んだ。

大きな声で。

そして私は見た。

一筋の白い閃光を。

「はあああ!! ? 道化ノ帯?!」

男の人が布を使って私を助けてくれました。

それと同時に人の様な異形が私と男の人の前に現れました。

でも、男の人は私を見て『大丈夫ですか?』と、声をかけてくれました。

「はあああ！！　？道化ノ帯？！！」

僕は？道化ノ帯？を飛ばしてスバルにそっくりの少女を助ける。

「大丈夫ですか？」

「は…　はいっ！！」

「それじゃキミにいくつか質問があるのだけれど…　キミの名前は？」

「ギンガです。　ギンガ・ナカジマ」

「ふうん…ナカジマ…　もしかしてキミ…　スバルのお姉さんかな？」

「！　妹を…　スバルを知っているんですか！？」

「知ってるよ。　さっき救助しましたから。」

「つつ!! ……良かった…」

ギンガの声が一瞬優しくなった。

ギンガを見ると？涙？を流していた。

「ギンガ。振り落とされないようにしっかりと掴まっ
ていてくださいね。じゃないと振り落とされてしまいますからね。」

「は……はいっ!! ……しがみつきました!!」

「うん。それじゃ……いくぞ!! レベル3!!」

僕は大量のレベル3に向かっていった。

「装填　？原罪の矢?!」

キュン！！

ドガアアアアン！！

レベル3の周囲が大爆発を起こす。

「流星・ブラボー脚！！」

ドガアアアアン！！

アレスのキックでレベル3が二十体ほど破壊した。

「続いて！！ 両断！ ブラボチョップ！！」

ズバン！！

さらに二十体ほど破壊した。

「続いて、続いて！！ 粉碎！ ブラボラッシュ！！」

ドガガガガガガ！！！！

さらに、さらに二十体ほど破壊した。

「闇に、沈め。ブラッディダガー!!」

ドガガガガガガ!!

アインのブラッディダガーがレベル3を三十体ほど破壊した。

「そろそろ終わりですね。【ほの白き雪の王、銀の翼もて、眼下の大地を白銀に染めよ!】 来よ、氷結の息吹!」

僕の? 氷結の息吹? により全てのレベル3が氷付けになった。

アレ「終わった。ギンガは此処でお別れですね。後少ししたら他の誰かが来るだろうから、その人についていてください。」

そう言って僕はギンガと別れた。

二話（後書き）

今回少し更新遅れました。

三話

三話

「？火炎散弾？！！」
フレイムバレット

クロードの？火炎散弾？が無数に放たれる。

因みに？火炎散弾？はフェイトが使うプラズマバレットと同じで
炎か雷か。』の違いだけです。

「？判？劫火灰燼 『火判』！！」

劫

クロードの？火炎散弾？に対して僕は『火判』を放つ。

ドガアアアアン！！

爆発が起きる。

「『火判』であの威力…凄いな…」

「そうかな？ アレンや私にとっては普通の威力なんだけどな。」

アイン「（貴方達二人は一体何者なんですか？）」「↑（汗）。

戦闘

「うおおお！！ 今の私^{あたし}の最高の技！！ 【召喚竜！！ 我が元に
来たれ！！】出でよ！！ 劫火^{こっか}の竜！！ ？火竜？！！」

クロードの目の前に四角い魔方陣が展開され、その中から炎に包まれた一頭の？火竜？が姿を現す。

因みに？火竜？のモデルはリオレウス（通常）です。

身体は人で巨大な二つの双翼を持つ人型の竜。 体つきは女性。

「久しいな。 クロード。 我を呼び出すとは…その者はかなりの
力量の持ち主と見受ける。 奴を倒せばよいのか？」

「久しいね。　？火竜？。　うん。　その通り。　彼はかなり強い。全力でいくよ！！　？火竜？！！」

「よかるうー！！　いくぞ！！　（まずは様子見）　？紅蓮？！！」

灼熱の炎が地を這う斬撃になり、アレンに向かって放たれる。

「（斬撃？）　？王嵐？！！」

王嵐「オウラン」：ただ単に刀を振り回して斬撃を飛ばす技。最弱クラス。

ギギイイイイン！！！！

「ほう？　我が？紅蓮？を弾くとは…」

「…………マジ？」

クロードは？火竜？と対等に渡り合っているアレンに対し、『マジ？』と、疑問をもらしていた。

「…………クロード、彼女は召喚師だったのか。」

「あれ？ アイン知らなかったんですか？ 彼女の召喚竜？火竜？は召喚竜の中でも1、2を争う攻撃力と防御力を持ち合わせた召喚竜なんですよ。」

「…………、そうだったのか…」

何故か悲しみにうちひしがれていたアインでした。

戦闘組

「？火炎槍？！！」
ヒートランス

？紅^{あか}い炎の槍？を八つ程展開させてアレンに向けて放つ。

ギャン！！

「？紅蓮の盾？！！」

ズオッ！！

？紅蓮の盾？は？火炎槍？が触れたとたんに？火炎槍？を吸収してしまった。

「何！！？」

「マズイ！　？火竜？！！　下がって！！」

「！！？」

「いい判断ですが…手遅れ。」

アレンの右手になのは、フェイト、はやての三人の魔方阵が重なって展開されていた。

「輝け！　閃光！　？エターナルブレイカー？！！！」

エターナルブレイカー：なのは、フェイト、はやての三人のブレイカーの魔方阵を重ねて右手に展開する。三人のブレイカーを混ぜて放つ収束砲。　なのはのスターライト、フェイトプラスマザンバ、はやてラグナロクの三つのブレイカーの性質を持つ。　威力は最強クラス。

「な…！！？　　うわああああ！！！」

「うわああああ！！？」

収束砲は二人を巻き込みながら着弾地点で巨大な爆発が起こる。

ドガアアアアン！！！！

「……………しまった…大丈夫ですか！？ クロード！？ 火竜？！」

「……………大丈夫…」

「ケホッ！ ケホッ！ …………… 我もなんとか大丈夫だ。」

四話

四話

ミッドチルダ郊外、リニアレール付近上空よりさらに

上空

「うわあ… 数が多いですね…」

「あのガジェットドローンっていう機械… 色々種類があるね。あの小さい長丸みたいなのが？型。鳥みたいに飛行してるのが？型。で、最後の大丸みたいなのが？型だね。確か魔力結合を消す事によって魔法を無効化させるフィールド… AMF 通称アンチマギリングフィールド。リニアにいるリインは大丈夫みたいだね。他の四人は… 少し心配だけどね…」

「リインか… 懐かしいな。 （はやては元気にしているのだろうか。

」

「あの四人の内、青髪の女の子とオレンジ髪の女の子が一緒のチームみたいだな。あの二人は中々やるな。あっちの赤髪の男の子とピンク髪の女の子はまだまだ幼い。訓練を積みめばもっと強くなれるだろう。」

「クロードはなんで解説してるんでしょうね？ ……やっぱり増援が来ましたか。しかも増援は『アクマ』！　なのは、フェイトの所にはレベル3が約百体ずついますね。リニアの所にはレベル4が一体…アイン！　アレス！　クロード！　貴女達三人はなのはとフェイトの所に。僕はリニアにいきます。」

「『了解！！』」

僕達はそれぞれの場所に向かう。

——ミッドチルダ郊外、リニアール付近上空——

「これは…『アクマ』！！？　数が多い…！　フェイトちゃん！」

「なのは！　コレ全部『アクマ』みたいだよ。ロングアーチの連絡では私達の所にはレベル3が約二百体いるみたい。FW陣の所

にはレベル4がいつてるみたい!」

フェイトの言葉になのはは顔色を変える。

「レベル4!!? 急がなきゃ! でも…」

レベル3はなのは達を囲む。

「素直に行かせてはくれないよね…、なのは!」

「うん! 行こう! フェイトちゃん!」

私達は『イノセンス』を発動させてレベル3の群れに向かって行きました。

リニア上部

「ふふふっ…」

「何…!? ガジェットじゃない!?」

「もしかして…なのはさんやフェイトさん、はやてさんが言った『アクマ』っていう機械がコレなんじゃ…」

「エリオくん…」

キヤロがリニアに乗っていたエリオに声をかける。　するとエリオは…

「……！　危ない！　キヤロ……！」

ドンッ……！

「えっ……？」

ドガアアアアン……！！

「う……あ……」

私はフリードの背中に倒れ込みましたがエリオくんの方を見るとエリオくんが岩に叩きつけられていました…

「エリオ！！？　アイツ…今…何をしたの！？」

スバルの言っている事が最もだ。

次の瞬間

『アクマ』がスバルの目の前にいつの間にか移動していた。

「速い…！！？」

スバルに『アクマ』の拳が当たる寸前

バキィィィィン！！！！

スバルの前に一人の男の人が立っていた。

「久しぶり…いえ…四年ぶりですね。　大きくなりましたね。　スバル。」

ミッドチルダ郊外、リニアール付近上空

「『装填』　？原罪の矢？！！」

ドガアアアアン！！

「？二幻刀？！！」

ズバン！！

なのはは？断罪者？で、フェイトは？六幻？で『アクマ』を撃退していたが『アクマ』は一向に減らない。

「いくら倒してもキリがない……」

「転送されてる……？　根元の方を叩かないと直ぐに転送されてくる。」

「でも…… 数が多すぎるよ…… このままだと……」

私達の目の前にレベル3が三体来ていた。

——— その時 ———

「ブラッディダガー！！！」

「？道化ノ帯？！！」

ドガアアアアン！！！！

聞き覚えのある声と共に三人の女性が降りてきた。

「八年ぶりだな。高町。テストロツサ。」

「八年ぶりだね。なのは。フェイト。話は後だよ。今は…
コイツらを倒さなきゃ。」

——リニア上部——

「久しぶり…いえ…四年ぶりですね。大きくなりましたね。ス
バル。」

「アレンさん…？」

「離れていてください。？十字架ノ墓？！！」

「おやっ？ 貴方は…」

ドガアアアアン！！！！

「スバル！！」

「ティア！！」

「あの人が… あんたが何時も話してた…」

「うん。 アレンさん。 私の… ? 憧れの人？」

「? 血塗られた十字架?!!」

血塗られた十字架「ブラッディクロス」：? 紅の十字架?。 ? 紅
い十字架?。 ? 血の十字架?。 等数々の名前を持つ。 真紅に
染まる紅い十字架。 ある意味どんなものでも破壊できる。 ? 道
化ノ演劇?。 ? 道化ノ剣?。 ? 退魔ノ剣? の状態でも使える技。
最強クラス。

ズバンッ！！！！

レベル4「!!!!?」

レベル4は消えた。

——ミッドチルダ郊外、リニアレール付近上空——

メタルジャケット

「防護服の『武装錬金』シルバースキン！」

グレートアックス

「大戦斧の『武装錬金』フェイタルアトラクション！！」

クロススレイア

「十文字槍の『武装錬金』激戦！！」

三人は『武装錬金（？）』と言う武器を展開してそれぞれ武器を構えていました。

——リニア上部——

「「「アレンさん!!」」」

「三人共。この少年…スバル達の仲間かな? かなり怪我をしていたので…? クリスタルゲージ・ライフエナジー? の中に入れておきましたけど…完全に回復するまでにはもう少し時間が必要ですね。」

「エリオは大丈夫なんですか?」

スバルが心配そうに聞いてきた。

「大丈夫だよ。エリオの命に別状は無いよ。エリオの怪我は時間が経^たてば治りますから後は医療班に任せれば大丈夫でしょう。」

「「「よかった…」」」

そしたら『ピタッ』と顔に小さな小人がくつついた。

「ふええーーーーん!! アレンお兄さん!! 会いたかったです
うーーーー!!」

顔にくつついていたのはリンだった。

「リイン…離れて…息が出来ない…苦しい…」
「あわわっ！！ すみません！！ アレンお兄さん。」

リインは素直に謝ってくれた。

これが僕達の再開だった。

四話（後書き）

今回出せなかった人物は次話かその後に出したいと思います。

五話

五話

ある部屋にブラインドからの一筋の光が差し込む。

「……………ん…朝日…あれ…？」

「すう…すう…」

「すう…すう…」

「ZZZ…」

一人…二人…三人…四人…五人…。 五人？

あれ？ なんで五人居るんだ？ 一人目（僕）、二人目^{アイ}、三人目^{アレ}、

四人目、五人目（？）… 五人目？ 誰だろう？

僕はそおつと布団を取ってみた。

果たして、そこに居たのは…

「…………… どうして… シグナムが… 此処に…？」

そこに居たのはシグナムでした。

因みに、僕達は『機動六課』の部屋を一部屋借りてそこに四人で寝ている。

「…………… う… う… ン…？ 起きていたのか… ウォーカー…」

「あはは… おはようございます。 シグナム。」

「ふわぁー… むにゃ むにゃ… むにゅ？ おはよう…、アレン…」

「おはようございます。 アレス」

「…………… ン… ふわぁ… おはようございます。 ウォーカー。 ……」

…何故… 将がこの部屋に居るのですか？」

「何を言っているのだ。 お前が入っていいと言ったのではないか。」

「??? 私は言っていないぞ?」

「何? じゃあ一体誰が...」

「私だよ。」

今さっきまで寝ていたハズのクロードがいつの間にか起きていた。

「今日は『囑託魔道師』の試験ですよ。速く準備をしないとけませんよ。」

「「はい。（はい。）おう。」」

アイン達が返事をする。

「そうか。お前達は『囑託魔道師』の試験を受けるのだったな。」

「そうです。そういえば... 模擬戦の相手は誰なんでしょうね? 昨日はやてに模擬戦の相手を聞き忘れてましたから」

「私は出来ることならウォーカーと戦いたいかな。」

「シグナムもか。私もアレンと戦いたいね。あ、でも私は試験管じゃないから無理か。」

「ウォーミングアップしましょうか。シグナム訓練所の様な場所...、ありませんか? ウォーミングアップをしたいのですが...」

「??? 何故だ? ?方舟?を使えば良いであろう。」

「?方舟?は出来れば使いたくないからです。今は理由を言えませんが、?方舟?は今現在、使用厳禁なんです。だから訓練室を貸して頂けたらな...っと。言う訳です。」

「なるほど。わかった。主に相談してみよう。」

「ありがとうございます。シグナム」

「礼など要らん。」

僕達は部屋を後にした。

「せいっ!!-- はっ!!-- ていやっ!!-- はあっ!!--」

「ていっ!!-- せやっ!!-- らあっ!!-- おりゃあっ!!--」

蹴り。突き。突き。回し蹴り。

「隙あり！！ せいっ！！」

「ぐううっ！！」

アレンの？正拳突き？がクロードの腹部に上手く決まる。

「一本！ それまで！！ アレンの勝ちですね。」

「組手強いね。 アレン。」

「負けたか… まっ、仕方ないけどさ。」

「？キュア？」

キュア：回復魔法。 ミッドチルダ式魔方陣。 多少の傷なら傷痕を残さず綺麗に回復させる魔法。 使用中は対象者の身体が光に包まれる。 自分を対象者にする事は出来ない。 アレンが使う回復魔法の中では最高クラスに部類されている。

「相変わらず凄い回復魔法だな。」

「まだですよ。」

こうして僕達は試験を明日に備えて訓練を始めた。

――

六話（前書き）

久々の更新です。↑あまり覚えて無い。

皆様どうか、暖かい目で見守ってください。

六話

六話

試験場

「「紫電…一閃!!」」

ドガアアアアン!!!

一度目の爆発。

「?十字架ノ爪?!!!」

「陣風!!」

ドガアアアアン!!!

二度目の爆発。

「？血塗られた十字架？！！」

「飛竜…一閃！！」

ドガアアアアン！！！！

三度目の爆発。

「はあああ！！！！」

ギイイイイイイン！！！！

火花が散る。

「流石ですね。 シグナム！！」

「流石なのは…、お前も同じだろう？ ウォーカー！！」

ギイイイイイイン！！！！

さらに火花が散る。

アレン「？判？劫火灰燼『火判・蒼』！！」

？判？劫火灰燼『火判・蒼』：ただの『火判』が蒼になっただけ。
性能に変化はない。

シグナム「紫電…一閃!!」

ドガアアアアン!!!

しかし、シグナムは…

「はあああ!!」

「なっ!!? そのまま突っ込んできた!!?」

ドガアアアアン!!!

ビルに吹き飛ばされる。

「どうだ!」

「手応えがありました。」

「そうか… しかし、十分に警戒を…!!?」

——ゴアッ——

？蒼い火判？が私の目の前に放たれていた。

私はとつさにパンツァーシルトで防御をしていた。

しかし、ウォーカーの狙いは盾を張った瞬間だった。

「御返^{おかえ}しだ！ 紫電一閃！！」

「しまっ……！！」

ドガアアアアン……！！

私はビルを二つ貫通した。

「ラキ！ シグナムが今のでやられるとは思えない。 ？紅蓮？…
展開出来ますよね？」

「上等！！ 私を誰のデバイスだと思って？」

「ふふっ…」

「？紅蓮？」

紅蓮：？紅の炎？を使つて『武装』の様なものを造り出す。これによつて造り出された『武装』は自分の意思によつて自由自在、変幻自在である。身に纏つたり、『武器』として使つたりと以外に様々な使い方ががある。魔力結合を分断する力がある。コレ自体に魔力は必要ないため、AMF濃度の高い場所でも使うことが出来る。纏わせた部分（部位）の身体能力を飛躍的に上昇させることが可能である。使用者はアレン、アレス、アイン、クロード、ラキの五人（正確には四人と一個）が今の所使えますが、アインとクロードは未完成な上に負担がかなりかかってしまう。最強クラスに部類されている。

僕は？紅蓮？を身体に纏う。

試験場観覧所

「アレン君凄いなあ…アレスちゃん。アレは『火判』のバリエーションか何か？」

「そうですね…簡単に説明すればバリエーションですね。」

「そういえば…私はウォーカーの『火判・蒼』を直に見るのは初めてだな。」

「そうでしたか？ レベル4との戦闘の時に確か幾度か見て^{いくど}いるハ

ズですが…」

「そうだったか？」

アレスの言葉にはやてが…

試験場

「なんだ？ アレは…？」

「魔力反応がありません。 魔力を使用した技ではなさそうです。」

「何かはわからないが…攻撃しなければ敗けだ！！ 紫電…、一閃
！！」

私は紫電一閃を使ってウォーカーに攻撃をする。

しかし

ガキイイイイイン！！！！

「何っ！！？」

ウォーカーの？紅の炎？に防がれてしまう。

しかも、それだけではなかった。

紫電一閃の炎が『かき消された』のだった。

「驚くのは…、まだ早いですよ！！ 発動！！ ？断罪者？！！

『装填』？紅蓮の炎？！！」

『装填』？紅蓮の炎？…？断罪者？の？原罪の矢？に？紅の炎？を
纏わせて放つ技。 威力は？原罪の矢？の約三倍。

———
キュン
———

「っっ！！？ 早い！？」

ドガアアアアン！！！！

「なんて威力…！！ 紫電…何！！？」

私は目を疑った。

「……」何れに当てるつもりですか？「……」

ウォーカーが五人に分身していたのだ。

「これでは…、何れが本物のウォーカーなのかわからない…!!」

「……」デイベイン……「……」

キュアアアア……—

「何!?! コレは…!」

—試験場観覧所—

「……」アレは…、デイベインバスター!!?「……」

なのは、フェイト、はやて、スバルの順番に驚くが、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラの三人は…

「まあ、不思議じゃねえな。」

「そうですね。」

《彼奴は我らと主はやて、テストロッサ、高町の技を使える上に、多分だが…、今の彼奴はスバル、ティアナ、キャロ、エリオの技も使えるだろうな。》

「「「えええっ!!?」」」

FW陣四人は驚愕していた。

試験場

「「「バスター!!!」」」

ドガアアアアン!!!!

シグナム「紫電…、一閃!!!」

ギャギャギャギャ...

シグナムは紫電一閃で難なくディバインバスター×5を突破した。

「はあっ!! はあっ!! ウォーカー。これでは最後の
一撃にしないか?」

「! (クロードの時と一緒に) いいでしょう。? 最後の1撃 ソレ?... 受け
ましょう。」

——沈黙——

アレン、シグナム「はあああ!...!」

お互いに地面を蹴り、ぶつかり合う—— ハズだった。

「「「「「ストップ!」」」」」

僕はなのは、フェイト、ヴィータ、シャマル、ザフィーラのバイン
ドで止められてしまった。

シグナムははやてに何故か説教されていた。

「何故止めるんですか！！　これから？^{エターナルブレイカー}最後の一撃？で終わらせるつもりだったんですよ！？」

「アレン君の実力は皆わかったから、もう、試合終了だよ。」

「仕方ありませんね…シグナム！　決着はいずれ…」

「ああ。　いずれ…、必ず。」

六話（後書き）

次話は試験の結果とアレンが隊長を勤める部隊の部隊メンバーとメンバー構成を書こうかなと思っています。

アレン「僕が隊長ですか？」

うん。俺も頑張る。部隊名も考えないと。

アレン「頑張ってください。」

因みに、大まかにアレス、アイン、クロードはアレンの部隊に入れるつもりだからね。

アレン「まさかの意外なメンバーが！」

七話

七話

僕ははやて達の元に集まっていた。

「それで…、僕の試験結果はどうなったんですか？」

「うん。アレン君は合格。文句無しや。」

「かなりあつさりですね。本当なんですか？」

「本当らしいよ。なのは、フェイト、はやての話でもアレンは戦闘だけ見ても申し分無いらしいし、筆記試験はほぼ満点、しかも、召喚竜が？火竜？だからね。非の打ち所がない感じらしいね。」

「まあ、そんな訳で、アレンは今日から晴れて囑託魔道師だよ。」

それから――」

「フエイトちゃん。そこからは私が言うで。実はな、アレン君アレン君が試験をしていた時に皆で決めたんだけどね？アレン君の部隊を決めようかと思うとるんよ。勿論、隊長さんはアレン君や。今のところ、主なメンバーは、アレン君、アレス、アイン、クロードさんの四人や。他のメンバーも居るんやけど、顔合わせはまた今度な。今は、FW陣との自己紹介や。」

「それじゃあ、FW陣の皆。自己紹介をしようか？」

『はいっ！』

「じゃあ私から…、ティアナ・ランスター二等陸士です。先日は相棒のスバルが危ない時、助けて頂いて、ありがとうございます。」

「エリオ・モンディアル三等陸士です！先日は怪我を治していただきました。どうも、ありがとうございます！」

「スバル・ナカジマ二等陸士です！四年前と先日はありがとうございます！さいました！」

キャロ「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。それから、友達のフリードリヒです。」

「それじゃあ最後は僕ですね？僕はアレン・ウォーカーです。つい先程、囑託魔道師+隊長になったばかりです。それから、一応、肩書きは囑託魔道師なので、名前の呼び方等は何でもいいです

よ。後、囑託魔道師なので敬語等は無しですよ？」

「それじゃあ…、アレン君の部隊の名前を決めなあかな。因みに、なのはちゃんがスターズ、フェイトちゃんがライトニングの隊長さんで、私がロングアーチの隊長さんや。それからアレン君の部隊は主にイノセンスを使って『アクマ』を倒すのが目的で、損傷したイノセンスの修理等、その他色々がアレン君の部隊の目的なんや」

「なるほど。（しかし——まるで『黒の教団』の科学班とエクソシストみたいな仕事ですね…ん？エクソシスト？）エクソシスト…」

誰かが僕の一言（小声）を聞いてきたそうです。

八話

八話

——あれから一週間後——

「疲れた…早く眠りたい…（でも、報告書が…他にも…嗚呼…鬱になりそう…頭が痛い…）クロード…？ 大丈夫ですか…？」

「大丈夫… じゃない… 物凄く… 気持ち悪い…」

死にそうにしているクロードがいた。

「まさか、これだけで…、約3日は動いた位に疲れるだなんて…」

「うーん…頭痛いよ…アイン、薬…」

「すまない…、昨日で全部無くなってしまった…我慢してくれ…」

「なのはがイノセンスを壊されて、その修理…疲れたよ…」

「確か…？断罪者？だよな…半壊だったよな…つか、聞いてねえぞ？>ノアの一族くが居るなんて…」

「どうやら、ノア達も此方に迷い込んだ見たいです。今のところ、「伯爵」が居ないだけ、まだマシですね。」

「今回、高町を襲ったノアは、自分を「ティキ・ミック」と名乗ったそうです。」

「ティキが…（「ロード」が来てないとすると…まだ、あつちは上手く、集まって無い？ うーん…、わからない…）」

「「主？（アレン？）」「」」

心配そうにアイン達は、僕の顔を覗き込んだ。

「大丈夫です。今度のなのはの任務…僕も同行します。」

みんな「やっぱり。」といていた。

八話（後書き）

最高に短いですね…

短さだと最高記録ですね…

ハア…

九話「15番目」のイレギュラー

「よっ！ ひさぶりだなあ。」 少年

「「ティキ・ミック」…！」

【ちいつ！！ ノアか！ なんでこんなところに…！？】

「アレンくん！ その人は——」

「わかってますよ。 なのは。 ティキの「メモリー」、
「快楽」は「この世の万物」を選べる能力。 ? 白い道化?! ? 断罪者
?! ? 六幻?! ? アレス!! アイン!! クロード!!
なのは!! ……いきますよ!!」

『『『おう!!』』』

「来いよ。 少年。 また、あの時見たいにもぎ取ってやるよ。
その左手を!!」

僕とティキがぶつかった。

「？十字架ノ墓？！！」

「ティーズ！！」

僕の？十字架ノ墓？はティキの「食人^{キャニバル}ゴーレム」ティーズによって防がれた。

前よりティーズの耐久力が上がっている…！？

一撃で壊せない…！！

「知ってた？」「今の」「千年公」の目的。」

【装填！　？原罪の矢？！！】

ティキはティーズで造り出した盾のように物で？断罪者？の？原罪の矢？を防いでしまった。

【何っ！？】

「少年の隣に居たあのシグナムって女。　彼奴が狙いなんだぜ？

意味、わかってるか？

少年は足止めされてんだよ。 「千年公」がそいつを狙ってんのはそいつが「15番目」の「ノア」、 「リンネ」の「空間」の「メモリー」を継承してるらしいぜ？」

「!!!? シグナムが… 「15番目」…?」

【? 八花螳螂?!!】

【? 血塗られた十字架?!!】

【装填! ? 紅蓮の矢?!!】

「フェイタルアトラクション!」

「サンライトスラッシャー!」

「ブラッティダガー!」

皆僕らの会話を横目にティキに一斉に攻撃した。

「皆…!?!」

【まったく貴方は…、向かいなさい。 シグナムの元へと。】

【こいつは俺達がなんとかする。 だから行け。 シグナムの元に。】

「わかりました。すみません。」

「アレくん！私も一緒に！」

「わかりました。急ぎましょう！！」

僕達はシグナムの元へと急いだ。

「誰だ貴様は！？」

「どうも、我輩は「千年伯爵」。名前だけならアレ・ウォー
カーから聞いていると思いますが？」

「貴様が「千年伯爵」……！」

「貴女には「メモリー」が継承されている。その「メモリー」は
まだ「覚醒」していませんがね。」

「……………何が言いたい？」

「貴女に我々側に来ていただきたいのです。」

「断る!!」

「よく言ってくれましたね。シグナム。」

「ウォーカー!!」

「おやおや。貴方はテキぱんに任せておいた筈ですが…?」

「? 白い道化? 達が引き受けてくれました。伯爵」…!」

「アクセルシューター!!」

なのはが突然、アクセルシューターを展開した。そしてそのまま…

「シュート!!」

伯爵に向かってアクセルシューターを放つ。

「効きません。」

伯爵が手から放った「黒い塊」がアクセルシューターを全て消し去った。

「くっ…！」

「ウォーカー！ 彼奴が…「千年伯爵」なのか？」

いつの間にか隣に居たシグナムが聞いてきた。

「ええ。そうです。彼が…「千年伯爵」です。」

九話「15番目」のイレギュラー（後書き）

オリジナル「ノアメモリー」出しました。

オリジナルのノア、リンネは「空間」を自在に操る力を持っていて
そのため、「空間」の「ノアメモリー」の継承者です。

実際、誰を「15番目」にしようか考えた結果、シグナムになりました。

十話 シグナムの「覚醒」

「伯爵…！」

「なあ、ウォーカー。」「ノア」とはなんなのだ？

私は伯爵に「お前が「15番目」です。」「といわれたのだが…」

「「ノア」と言うのは選ばれし「13人」が「ノア」として覚醒するのですが…」

「僕」や「シグナム（…）」のように「イレギュラー」として「14番目」、「15番目」の「ノア」が何故か「覚醒」したらしいです。」

「………？？？……」

シグナムはわかっていないのか、頭に「？マーク」をいくつも浮かべていた。

「ラッキーですねえ…。こんなところで「14番目」と「15番目」を見つけることが出来たんですから。」

「くっ！！（どうする！？　なのはの？断罪者？は一応なおっているけどなのは自身が魔法しか使わないならば、伯爵にはまず勝てない…！！　一体どうすれば…！！）」

「デイベインバスター…！！」

なのはの桜色の閃光が伯爵に向かって放たれる。

「当たりにませんよ。」

「当たらないなら、当てます。」

デイベインバスターの軌道が変わり、伯爵の周りを回り始めた。

「アレンくんがいなくなってから私達は何もしなかったわけじゃないよ。」

少し位は力をつけたんだから！」

デイベインバスターの光が強くなったと思ったらデイベインバスター

ーが突然五つに分裂して伯爵に命中した。

「！」

「デイベインバスター「バースト」！」

「……………戦いましょう！　なのは！！　シグナム！！」

「「うん（ああ）！！」」

「やってくれましたねえ……」

「ストライクバスター！」

ストライクバスター：なのはのデイベインバスターを元にした技。機動性と貫通性に優れているが威力自体はあまり強くない。

「飛竜一閃！」

「デイベインバスター「バースト」！！」

ストライクバスター、デイベインバスター「バースト」、飛竜一閃の三つの技が一つになって伯爵に放たれる。

「ほい。」

しかし、伯爵の力でかき消されてしまった。

「くっ…！」

「うつ…！？（なんだ！？　体が…熱い！？　一体なんなんだ！！？）」

「？断罪者？！！　シュートブラスト！！」

シュートブラスト：断罪者を用いて放つ技。

デイベインバスターより威力が高く貫通性に優れているが機動性がほとんど無く、熟練者でも自在のコントロールは難しい。

因みに？断罪者？の弾丸を魔力で包み込み使用する。

だがそれにより追尾性能が消えてしまった。

「おっとつと。　危ない、危ない。」

しかし、かわした伯爵の後ろからさらに追撃と言わんばかりにシュートブラストが伯爵を狙う。

「当たれー！！」

伯爵に攻撃が命中した。

「うわあああ!!!!」

「シグナム?!」

突然、シグナムが苦しみだした。

「あああああああああああああ!!!!!!」

「シグナム!! シグナム!!」

「覚醒が始まりましたね。」

「そんな?! シグナム! シグナムっ!!」

「ウォー…、カー…?」

私の意識は途切れた――

『起きろ。』

「誰だ…？」

『ようこそ。 シグナム。 「意識の次元」へ』

「「意識の次元」？ そんなことより、貴様は誰だ！？ 何故、私の名前を知っている…！？」

『まあ、急かすな。 俺の名前は「リンネ」。「空間」の「ノアメモリ」を持つ者だ。』

「「リンネ」…！？ 「15番目」の「ノア」か！ 何故貴様が私の中に居るんだ…！」

『そりゃお前が「15番目」の「宿主」だからだ。』

「私が…、「15番目」の「宿主」…？」

『なんだよ。 「千年公」から聞いてねえのか？ ま、お前は「千年公」の敵だから仕方ねえか。』

「私が「ノア」…？ そんなばかな… 私は… プログラムだぞ…！？」

『お前…、いつまでも自分たち「守護騎士」が「プログラム生命体」だと思ってるじゃねえよ。』

「なっ…!？」

『お前達「守護騎士」は「最後の夜天の主」八神はやてに出会ってから「プログラム生命体」としての力を失ってるんだよ。』

何故かは俺にもわからねえが……、俺はお前がはやてのところに現れた時からずっとお前の中に住んでたぜ。』

「そんな、ばかな…」

崩れ落ちるシグナム。

『おやすみシグナム。 安らかな眠りを…』

「シグナム…!」

「離れる。」

「!!!?」

目覚めたシグナムの周りには黒いオーラが纏われていた。

十話 シグナムの「覚醒」(後書き)

なのは後半空気ですね。

十一話

「久しぶりだな「千年公」。ウォーカーは「初めまして」。だな。俺が「15番目」の「ノア」…「リンネ」だ」

「「リンネ」…！？ シグナムはどうしたんだ！」

リンネは笑いながら話始めた。

「嗚呼。彼奴なら、俺の「中」で眠ってもらってるよ。案外呆気なかったな。俺の話が終わったら直ぐに気を失っちゃったんだぜ？ ハハハ！！ どうだ？ 傑作だろ？」

「……………」。

「何？」

「シグナムの「姿」と「声」でそんな言葉を使うな！！」

「あっそ。つまんねえ奴だな。まあ、いいか。」

言い終わった瞬間、リンネは僕の真正面に移動していた。

僕はそれに驚きを隠せなかった。

「なっ！！？」

「お前も…「空間」に消える。」

僕に片手を見せると、

「はあっ！！」

ビシッ！！

「空間」に亀裂が入った。

そして、その「空間の亀裂」が弾け翔んだ。

そして、そこに在ったものは「ブラックホール」にも似た「黒い空間」だった。

そこに吸い込まれる。

「うあっ…！！？　なんて…、力だ…！！　引き離せない…！！」

「アレくん!!」

「そうか。貴様も居たな。」

リンネはいつの間にかなのは真横に居た。

不意に僕は叫んだ。

「やめろおおおお!!!!」

しかし、その叫びも虚しくなのは「空間」に吸い込まれてしまう。

「そんな…?!」

「安心しろ。」

と、リンネ。

僕はリンネの方に顔を向けた。

「空間に飲まれれば、貴様も彼奴に会えるからな。」

「そんなの、信じられるか!!」

僕はそれを否定した。

「まあ、信じる信じないはお前の勝手だ。俺にはまったくもって関係無いからな。」

リンネが言い終わると吸い込む力が強くなった。

「うわあああつ！！？」

「俺の継承した「空間」の「ノアメモリー」だな？ 大半は「空間」自体を操る訳じゃない。「空間」に關与している「物質」、
「物体」を操るんだ。だから、その「ブラックホール」は俺の技
つていう訳だ。」

「なっ！！？」

嫌な予感がして、「ブラックホール」を見た。

すると――

なんと言つことだろうか。

「ブラックホール」が三つ重なっていたのだ。

「嘘だ…」

「さようなら。」「アレン・ウォーカー」♪」

僕は吸い込まれてしまった。

「うわあああつー！！！」

僕の意識はそこで途切れた。

「……………うう」

暗い「空間」の中、僕は意識を取り戻した。

「此処は…、「ブラックホール」の中か。悔しいな…全然歯がたたなかった…（シグナム…戻ってきてほしいな…）」

僕は心の中で思っていた。

シグナムに戻ってきてほしいと。

その時、なのはの声が聞こえてきた。

「アレンくん!!」

「なのは…？　なのは!？」

僕は内心驚いていた。

リンネの言っていた事は本当だったからだ。

僕達は直ぐに話し合いを始めた。

「脱出、出来ない？」

「そうなの。　デイバインバスターを使ってもデイバインバスター「バースト」を使っても、エクセリオンバスターを使ってもそして、私の最強の魔法スターライトブレイカーを使っても傷一つこの「空間」にはつけられないの。」

「デイベインバスターや、エクセリオンバスターなら未だしもスターライトブレイカーでも無傷だなんて…」

「うん…とってもショックなの…」

落ち込むのは。

スターライトブレイカーを喰らって無傷なのだから、仕方がない。

「……………出来れば使いたくなかった。」

そう言って僕は「黒い核鉄」を取り出した。

此処は「ブラックホール」の中だ。

もしかしたら、外まで届かずになのはただだから大量に「エネルギー生命力吸収」をしてしまうかもしれない。

だから――

「なのは。」

「アレんくん…?」

なのはは驚いた表情で僕を見ていた。

まあ、仕方ないだろう。

今まで「白髪」だった少年の髪の色が淡く光る「蛍火」になり、肌の色が熱を帯びた「赤銅」に変わったのだから。

「淡く光る「蛍火の髪」、熱を帯びた「赤銅の肌」…この症状は「ヴィクター化」と呼ばれていて、「人間」をやめた「証拠」です。」

「人間を…やめた…？ 何を言っているの…？ アレンくん…？」

「「？黒い核鉄？を「使う事」＝人間を「やめる事」」。僕はもう…貴女達を傷付ける事しか出来ない。だから僕にとってもなのは達にとっても。」

「「人間をやめた」って何…？ アレンくんは私達の前から…「また」いなくなっちゃったの…！！？」

「さようなら、なのは。目が覚めたらこの事を、皆に話してください。」「武装錬金」「サンライトハート+」。」

？黒い核鉄？のサンライトハートを展開した。

アレン・「サンライトクラッシャー！！」

僕は展開したサンライトハートのサンライトスラッシャーで「ブラックホール」を貫き、なのはと共に脱出した。

「本当にお久しぶりですねえ。 リンネ」

「ふん。 「14番目」は異空間に閉じ込めただけだ。 「14番目」なら、簡単に脱け出せるだろうが、「高町なのは」彼奴はしばらくかかるだろうな。」

話をしていると突然、空に亀裂が入った。

「どうやら、来たみたいだぜ。 あんたはどうすんだ？ 「千年公」。
俺はしばらく旅に出るから帰らないぜ？」

「わかりました。 では、先に帰らせてもらいますよ。」

「嗚呼。」

「千年公」は？ 方舟？ で消えた。

「さて…」

亀裂が「パライン！」と割れて中からウォーカーと高町が現れた。

「リンネー！」

「待ってたぞ。ウォーカー！」

「約束がある。」

「約束」＝戦闘のルール。

「いいだろう。」

「なのはや六課の人間、一般人には手を出さないでほしい。それだけだ。」

「いいだろう。そのルール…請け負った。」

俺はウォーカーの出したルールを了承した。

「？十字架ノ墓？…！」

「^{メテオ}隕石」！！

僕は？十字架ノ墓？でリンネは「隕石」を使用した爆発で戦闘が開始された。

【まったく…全然ティーズの数が減らない…】

【まったく…体力が全部持っていられちゃうぜ…】

【この程度で音をあげるな！！ 装填！！ ？原罪の矢？！！】

「だから効かないっての。」

ティキはティーズを使って簡易的な盾を造り出して？原罪の矢？を防いでしまう。

【ちいっ…！！】

毒づく。

「お前らこんなところでいつまでも戦っていいのかよ?」

『『『………?』』』

ティキの言葉にその場に居た全員がティキを向いた。

「あのシグナムって奴。」「覚醒」したらしぜ? 今、少年が戦ってるらしいからな。」

『『『なっ!!?!?』』』

全員目を見開いていた。

「覚醒」したシグナムとアレンが戦っているからだ。

「俺は帰るがお前達はどうする? まあ、お前達の事だから俺には関係無いがな。」

そう言い残し、ティキは去っていった。

【皆！ 急ぎましょう！（嫌な予感がする…、アレン…）】

『『おうー！』『』』

僕達はアレンとシグナムの元に急いだ。

「サンフレア太陽熱」！！」

「？消える？！！」

リンネは「太陽熱」を使ってアレンを攻撃するが、アレンの？消える？の掛け声で完全に消えた。

「無駄だ！！」

「厄介だな。そのレアスキル。『創造の力』と言ったところか。

（少しずつだが…力が奪われていく…彼奴の「螢火の髪」と「赤銅の肌」のせいか…？ くそっ…）

「エネルギー！ マキシマム 最大出力！！ うおおお！！！」

「ブラック シールド 黒孔の盾」！！」

アレンの突撃をリンネはブラックホールに似た黒い盾で防ぐが、盾に少し亀裂が入った。

「何っ！？（威力が、さっきよりも強い！ まさか…彼奴は俺の力を吸収しているのか！？）」

「？断罪者？！！」「装填」！！？紅蓮の矢？「染」！！」

「なめるなあああああ！！」「ブラックホール」「五層」！！」

？紅蓮の矢？「染」を放つが、「ブラックホール」「五層」に全てのみこまれてしまった。

「リベレイション 放出」！！」

そして、そのまま？紅蓮の矢？「染」を全て「放出」してきた。

「しまっ…!!」

アレンの近くで爆発が起きた。

「甘かったな。　ウォーカー。」

「っああああ!!!!」

僕の右肩から下が無くたっていた。

「うあああっ!!」

僕は叫んだ。

十二話（前書き）

因みにリンネは女です。

俺と言っていますが、紛れもなく女です。

十二話

リンネ・「ずいぶんとてこずらせてくれたな。だが、もう終わりだ。」

アレン・「どうでしょうね？」

こんな状況下でウォーカーは「ニヤリ」と笑った。

リンネ・「ふんっ。負け惜しみを……………消えろ！！」「隕石」「斑」！！」

隕石の群がアレンを襲った。

アレン・「ヴィクターは……………体を再生出来る！！」

アレンに隕石が当たって爆発が起こった。

ズズウウー——ン……

？白い道化？・【ツツツ！！？　なんて……圧力……！！！】

アレス・「吹き飛ばされるよ——！！！！！！」

アイン・「アレス！！」

吹き飛ばされそうになるアレスをアインが掴む。

？六幻？・【ちいっ………！　彼処に居るのはわかってるのに……
……！！　近寄れねえ………！！】

？断罪者？・【彼奴等……………どれだけハードな戦いをしてやがる………！】

リンネ・「はあっ……………はあっ……………どうだ……………！」

さすがに疲れが出てきたな……………

未だに吸収は続いてる……………！

アレン・「まだまだ僕は死にませんよ。」

そこには右肩が再生したウォーカーが居た。

リンネ・「ちいっ……………！」
「放出」！！」

？紅蓮の矢？「染」がブラックホールから放出される。

アレン・「？道化ノ帯？！！」

？紅蓮の矢？「染」を？道化ノ帯？で貫く。

リンネ・「ちっ．．．．．まあいい。それより、薄々は気づいてるんだろ？俺がこの「体」を使っている限り、こいつの「剣」、
「レヴァンティン」を使えることが。」

そう言っってリンネはレヴァンティンを展開した。

だが、レヴァンティンは色が変わっていた。

アレン・「「黒」．．．？」

リンネ・「俺の「魔光色」が「黒」だからな。」

アレン・「シグナム……………返してもらっ！！」

リンネ・「だったら、俺を倒してみろ！！　そうしたら、シグナムが戻ってくるかもな！！」

アレン、リンネ・「第二ラウンド開始だ！！」

そしてまたぶつかった。

――

全員・『アレン……！！』

全員、自分たちの無力さにうちひしがれていた。

そんな時――

アレス・「アレン……！！！！！！」

全員・『アレス!!?』

アレスは一人、アレン達の元に走って行ってしまった。

リンネ・「紫電一閃!!」

アレン・「火判」!!」

リンネは紫電一閃をアレンは火判を使うが、リンネは火判をまるで紙を斬るかのように簡単に切り裂いてしまった。

アレン・「（やっぱり、まだ勝てない………！ ヴィクター化してるのに、まだパワー負けしてる………！）？ 十字架ノ墓?!」

リンネ・「まだ、無駄な抵抗を続けるか！」

アレン・「無駄じゃない！　まだ、希望は在る！！」

ブラックシールドに？十字架ノ墓？が当たるが、少しだけ、亀裂が入っただけで防がれてしまった。

リンネ・「希望なんて……………始めっからねえんだよ！！」

リンネから、さらに一層強い「黒い光」が放たれる。

アレン・「ツツツ！！？」

リンネ・「もう、お前は消える。」「漆黒ノ墓穴^{ホール}」

リンネの背後にいままでより比べ物にならないくらいの大サイズのブラックホールが出来上がっていた。

リンネ・「今度は……………簡単には脱け出せない。　永遠の闇に飲まれて消え去れ。」

アレン・「うおおお!!!!」

サンライトハートを地面に突き刺した。

アレン・「諦めない！ 諦めなければ、きっと軌跡は起こせる!!」

リンネ・「消えろ!!!!」

そんな時

*・「アレン————!!!!」

一人の女の子の声が響き渡った。

十三話

十三話

「アレ――――！！！！」

「アレス！！！！？」

「ユニゾン・イン！！」

僕とアレスは一つになった。

純白の「双翼」。

蛍火の髪。

最大の特徴、燃えるような紅の瞳。

「それが……貴様のユニゾンか……」

「そうだ！ 最後の力だ！！」

リンネは不適に笑う。

「最後……か。 ふんつ。 甘いな。 そんな力じゃ俺は倒せないぜ！！」

「倒さない！ あくまで、救うんだ！！」

リンネは目を見開いた。

相手は自分を倒すのでは無く、あくまで自分の中のシグナムを助けると言ってきたのだ。

「だったら……やってみろよ！！」

「ミサイルランチャーの「武装錬金」「ジェノサイドサーカス」！！」

「そんなもの、「漆黒ノ墓穴」の前では無力！！」

「そんなことは無い！！ 絶対なんて……無いんだ！！」

「黙れ!!」

「漆黒ノ墓穴」が吸い込みを開始した。

「FIRE!」

アレンはジェノサイドサーカスのミサイルを全て発射した。

轟音が轟く。

「どうなったの………?」

心配そうに呟くアレス。

「ツツツ……!! まだ、壊れてない!!」

「漆黒ノ墓穴」には傷一つついていなかった。

「ククク……… どうした? 終いか?」

「なっ!!!? ヴィクター化が………!!!? 解けていく………!」

どんどん、アレンのヴィクター化がどんどん解けていく。

「どうやら、「ヴィクター化」とやらも「漆黒ノ墓穴」には無駄骨の様だな。」

「まだだ!! まだ、諦めない!!」

「さっきから言ってるだろうが……希望なんてものは……無いんだよ!!」

「守りたいものがある限り、人はなんだって出来る!! 諦めなければ、いくらでも、人は戦える!!」

「ウルセエ………テメエは「コイツ」を助けたいただけだろうが!!」
「14番目」!! ……教えてやるよ。 「15番目」の過去をな!!」

「過去………!?!」

【攻撃が……………止んだ？】

【気を抜くな。 まだ、何が起こるかわからないからな。】

【……………静かすぎる。】

「あれは、何千年も前の話だ。 俺はまだ、普通の人間だった時の話だ。

桜が満開の春。 俺は、ある男と一緒に一本の「桜の木」の下で待ち合わせをしていたんだ。

だけど、「彼」は来なかった。 後から知ったのは「彼」は殺されていた。

当時、男が何人も殺害されている事件が多発していたんだ。 それを行っていたのはお前達のイノセンスだった。

俺は怒りに震えた。 そんな時、俺は「覚醒」したんだ。

当時の俺には力を制御出来ずに度々暴走していたんだ。

わかるか？ 俺の？暴走？はそんじょそこらの？暴走？とは訳が違
う。

一歩間違えば、世界が崩壊しかねない。」

「世界が………！？」

「そんな力、操れるわけ………！」

「確かに、最初は俺もそう思ったさ………だが、俺はそれが出来た！
何故だと思う？ 貴様の言う、「信じる気持ち」を持っていたから
だ。

だが、それまでだった。

俺は見放された………全てから！！

全てから見放された俺は次に何をしたと思う！！？

盗み………時には殺し屋まで一時はやっていた。

そんな時だった。

千年公に会ったのは——」

「逃げてるだけだ」

「．．．黙れ」

「貴女は逃げてるだけだ。　自分が全てから見放されたと言って、誰とも向き合おうとせず、現実から逃げている。　ただ、それだけなんだ。」

「黙れ！！」

「砂刃双！」

アレンの両手に砂の双刃が現れる。

「砂の双刃なんぞ効かん！！」

「わかりませんよ？　アレス！」

「うん、了解！　炎熱変換！」

ゴウッ！

アレンの砂刃双は炎を纏った。

「いきます。」

「抜かせ!!」

「てやあつ!!」

「はああつ!!」

キキン!!

刃と刃が激しくぶつかり合い幾つもの火花を散らす。

サドン・ウェーブ
「砂の波!!」

振動が砂に変わり、リンネに向って放った。

サザン・ブッポロ
「海の鈴!!」

海の漣が砂の振動とぶつかり、爆発を起こす。

「くうつ．．．! (ちいっ．．．!)」

一度、二人は距離を取り、直ぐ様距離を積める。

「はあああ！！」

ガキィン！！

幾度となくぶつかり合う二人の刃。

「嘆きの唄！！」

「!!？」

透明な球体が突然爆発するように破裂する。

ギ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
ン
！
！
！
！

「あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
”
！！！！？？！！？」

頭が
・
・
・!!
割れる
・
・
・!!?
?

「おおお！」

アレンの懷に入り、切り上げ、切り下ろし、横一線、振り上げ、叩き付けを三回ずつ行う。

「うわあああああ！！！」

ド
ガ
ア
ー
ー
ー
ー
ー
ー
！
！
！
！
！

「ふん、終わりか？」

ボ
ガ
ア
ー
ー
ー
ー
ー
ン
！
！
！
！
！

「まだだあああ——！！！」

「馬鹿に一つ覚えが……」

ブン！！

スカッ！！

「何・・？」

リンネのレヴァンティンは空を切っただけだった。

「．．．！！？ 何だ．．．！ この魔力反応は．．．！！？」

「喰らえ．．．！！！」

「！ 下か！！」

リンネは下を向いた。

「？エターナルブレイカー？！！！」

「何．．．！！？ デカイ．．．！！？」

エターナルブレイカーの閃光はリンネを飲み込んで大爆発を起こした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9477u/>

魔法少女リリカルなのは—異世界に行ったエクソシスト—

2011年11月7日00時59分発行